

商工業

マクスの企業に近世の綜劃運動の一類型を看取し得るのは興味がある。

次に商工業を観察しよう。ペルシヤの外敵が撃攘され、是と結託せるフェニキヤの商業が衰へて後、ギリシヤ商工業が前世紀以來の方向に向つて一段の進歩を示したことはいふまでも無い。注目す可きことは、前世紀迄商工業の代表者であつたイオニヤ方面の諸市が、イオニヤ叛亂の失敗等によつて次第に昔日の面影を失ひ、遂にギリシヤ本土、西部地中海方面に地を譲つた事實である。織物工業の中心として、植民事業に華々しい活躍を示したミレツスに代つて今やコリント、エギナ、ピレウス等が商工業の中心を以て目ざるに至つた。

(1)イオニヤ諸市の衰頹は、デルス同盟諸市のアテネへの獻金の額によつて最も明瞭に窺はれる。446-440 B. C. に於けるエギナ、タスス(Thasus)の獻金は三十タレントであるのに、同期間のミレツスのそれは僅かに五タレント、フォケーアは二タレントに過ぎぬ。(Beloch: Gr. Gesch. II² 1 S. 83 244a)。

工業經營の組織

ホメルスの詩篇に描かれた世界では、工業は殆ど全く家内工業であり、詩中の英雄は

時に農耕を行ひ、時には羊を飼ひ、又時には大工の仕事を行ひ、婦人は家に在つて機を織る有様であつて、分業は若し存したとしても、頗る低い程度のものであつた。本書の植民の章からも想像さるるやうに、五世紀の工業の大勢は、既に此の封鎖家内工業的な階程を脱して頗る近代化して居た。工業生産の分化に關しては、屢、引かれる例であるが、クセノフォンによると(Cyrupaedia VIII, 2, 5)、大きな市では皆一人一業を以て生活し、屢、職人は一業の一部分を受持ち、或者は男の靴のみを、或者は女の靴のみを作り、又靴の革を切るを専門とする者、縫ふを専門とするものがあつた(Plutarch: Pericles. 12. Platon: Laws. VIII. p. 846. d. e. Republic II. 5. 1参照)

以上は極めて小規模の生産の例であるが、是とは別に、近代の工場制度を思はする比較的大規模の工業が行はれた。アテネのデモステネス(Demosthenes 一五三頁)の父や、辯舌家リシヤス(Lysias)の父の經營した工場が是であり、又ラウリウム(Laurium)銀山の經營の如きは此の適例である。此の際近世工業との根本的相違は、其の工場労働者が賃銀労働者ではなく、主として非自由民即ち奴隸であつた事で、工場管理者すら多く奴

ギリシヤ工業
に於ける資本
主義の問題

隸の中から選ばれたことは、大農場經營の場合と變らなかつた。デモステネスの工場の一は刀劍製造業で三十三人の奴隸を、他は椅子製造業で二〇人の奴隸を用ひ、リシヤスの父の武器工場は一二〇人の奴隸を用ひて居た。然し是だけの事實から推して此の時代に近代工業資本主義の類型を求め⁽¹⁾る事には警戒を要する。其處に近代工場の機械の噪音の無かつた事は言ふ迄も無いが、當時の資本の投下は極めて小規模であり、企業の形態から言つても殆ど個人企業であつた。その經營場である *ergasterion* は「仕事場」であり、工場 (Factory) の概念はギリシヤには存しなかつたとさへ言はれる。鑛山經營の如き最も大規模であつたが、その多數の鑛坑の採掘權は、多くの經營者に分賣せられて居たのである。

奴隸の價格

兎に角、此の時代の工場經營にあつては、労働者たる奴隸⁽²⁾の購入費が資本投下の重要な部分を爲して居たことは疑があるまい。奴隸の相場は各奴隸の用途、素質、能力によつて頗る異つて居り、半ミーネ(約二十圓)から一タレント(約二千四百圓)迄の開きがあつたと言ふが(Xen. Memorabilia II. 5. 2)¹ 一般に紛挽き、鑛山使用の奴隸の相場は一

ミーネ見當と推定されて居る。デモステネスの父は一九〇ミーネを投じて、三十二、三人の刀劍製造の奴隸を買ひ、同じく四〇ミーネで二〇人の椅子製造奴隸を買ひ、それぞれ年三〇ミーネ、一十二ミーネの純益を擧げたと言ふ (Dem. adv. Aphob. I. S. 816 [XXVII. 9])²。

①L. Brentano: Das Wirtschaftsleben der antiken Welt. 1929 S. 47 ff. S. 51. を看

よ。Francotte: L'industrie dans la Grèce ancienne, Salvioni: Der Kapitalismus im Altertum は是に反對する。

(2)此の機會に古代の社會機構の最も著しい要素である奴隸に就いて二三誌す事は無駄であるまゝ。此の商業發展の時代に入つて、奴隸の使用は前代を遙かに凌駕し、ギリシヤの工業の頗る重要な要素となつたことは異論が無い。奴隸の使用は甚だ多岐に互つて居た。上述の工業の爲の使用には、自ら奴隸を所有する外に、他人から奴隸を賃借することも出来た。奴隸貸業は可なり大仕掛に行はれ、ファイルモニデス(Philemonides)は三百人を、ヒッポニクス(Hipponicus)は六百人を、ニキヤスは一千人を抱へて居た。若し貸借中に奴隸が病死、或は逃亡する時は、賃借人が是を負擔する定であつたから、是は頗る確實な企業であつた。(Xenoph. Poroi参照)

奴隸は工業の爲の外、多く家事の爲に使はれた。門番、食事掛は勿論、主人や娘の外出に従者となるのが常であつた。其の他教養ある奴隸は主人の爲に書籍の書寫に當つた。有名な六世紀頃のイソップ(アイソプス Aesopus)も、はじめは奴隸であつたと傳へられる。か様な奴隸の中には、主人の信用を得て家政を切り廻し、主人の子息の教育に當る者もあつた。此の種の奴隸も矢張り貸借が行はれた。其の他奴隸が獨立に農工業を經營し、主人がその利益の一部を收得する形式があり、又一藝を心得た女奴隸を養つて、宴席に侍せしめ或は賣淫を行はせる者もあつた。

其の他アテネ市の警察に當つた二百人のスキタイ人(Scythians)の弓手のやうに、國有のものがあり、又奴隸が陸、海軍に用ゐられることもあつた。(詳しくは Wallon の大著 Histoire de l'esclavage dans l'antiquité の第一卷を見よ)。

か様に奴隸は社會生活に必須の要素となり、又何人もその使用を怪しまず屢々工業は自由人にもふさはしからぬ仕事と考へられた。(ギリシヤ人の職業觀、奴隸觀、其の他の經濟思想一般については經濟學全集二十三卷、高橋誠一郎氏著『經濟學前史』古代の項を看よ)。然し吾々は、先にも述べた様に(一六一頁)奴隸の外に様々の自由労働者や仕事師(banansoi)の存したことを忘れてはならない。四世紀半にフォキスの一富人が一千人の奴隸を購うた時、市民が生業を失ふと

て反抗を起したこともその一證とならう。一般に非自由民の数はギリシヤ本土では東部の工業地帯に多かつたことは言ふまでもない。然しコリントに四十六萬人、エギナに四十七萬人の奴隸が居たと言ふ所傳(Athenaeus VI. p. 272 B. D.)が後世の非常な誇張である事には何人も異論がなく。今 Beloch 氏の計算に隨つて、紀元前四三二年のヘラス本土の人口概数を擧ぐれば次の如くである。(Beloch: Bevölkerung der griechisch-römischen Welt S. 506)

地名	總人口	奴隸及び隸民
ペロポネソス	八九〇・〇〇〇	三五〇・〇〇〇
中部ギリシヤ	四八五・〇〇〇	一七〇・〇〇〇
東方の島々	四〇〇・〇〇〇	一七〇・〇〇〇
西ギリシヤ	四一六・〇〇〇	四〇・〇〇〇
テッサリヤ	四六〇・〇〇〇	二五〇・〇〇〇
マケドニヤ	四〇〇・〇〇〇	二五・〇〇〇
總計	三・〇五一・〇〇〇	一・〇〇五・〇〇〇

以上の組織を持つた比較的大規模の工業によつて生産された品々は、當然廣大な販路

冒險貸付

を求めねばならなかつた。殊にギリシヤ本土は多量に穀物を黒海岸、シシリ、エジプトの諸地方から輸入する必要があつたので、海外貿易は夙に發達し、吾々は此處に明瞭に資本主義的企業の萌芽を認め得るのである。そして此の海上貿易の投資が、ギリシヤ人の知つて居た最も重要な投機の機會であつた。其の企業形態は中世末イタリー都市及び近世初期の英國に於て海外貿易に行はれた形式に酷似して居る。即ちアツチカの資本家は、不動産を擔保としてその資本を低利に貸付ける代りに、是を海外貿易に投じ、積荷や船舶を擔保として、輸送者——是にはメトイキや被解放奴隸が多かつた——に貸付けたのである。當時の最大型船たる三段權船も一萬タレント(二六〇噸)を以て頗る大型とする程度であり、其の上今日と違ひ磁石も海圖も燈臺もない時代であつたから、沿岸航海が主であつたが、航海の危険率が甚だ高かつた。それで近世初期の東洋貿易に見るやうに、此の危険を冒して無事に一航海を終了すればその利益は莫大なものであつた。ヘロドツス(IV. 152)によると、サムス島のある船はエジプトに航せんとして誤つてタルテッスス(Tartessus、今日のスペインの南部)にたどりつき、歸航の上で六〇タレント(約

一四六、〇〇〇圓)の利を得たと言ふ。此の所傳の眞偽は明かでないが、ポンツス方面やアドリヤ海方面に出動すれば、一〇〇%の利を得ることは事實であつた(Lysias adv. Diogeiton 25)。近海のエーゲ海方面でも利益は鮮少では無かつた。か様に利益は莫大であつた一方、若し途中船荷に變事があつた場合には、資金の借手は資金返済の義務を免ぜられる定であつたから、か様な貸金の利息(Nautikos tokos)は頗る高率で、四世紀の半頃では二〇—三〇%に及んで居た(Xenoph. Poroi III. 7-14 参照)。當時一般の利息は一〇—一五%見當であつたと考へられるから、上の高利な冒險的投資が、ギリシヤ人の射利心を動かしたことは容易に想像が出来る。此の危険防止の手段として、數名の投資者が團結して比較的小額を出し合ふ事が行はれた⁽¹⁾。彼等は一航海終了後は、その利益を清算して團結を解いたので、此の點も近世初期の貿易企業に酷似して居る。か様な海外貿易に直接従事する卸商人(Emporoi)は、自ら船主(Naukleros)である場合もあり、然らざる場合もあつた。彼等は時には直接小賣にも従つたが、この他に専門の小賣商人(Kapeloï)のあつたことはいふまでも無い。

(1)此の他に資本家の共同企業としては、租税請負制が擧げられる(一六三頁)。是は危険が多く到底一人では引受がたく、資本家が結託したのであるが、一年の租税取立ての後も、次年の便宜の爲に解散せず、次第に獨占的となり一國財政の痛となりつゝあつた。(Beloch: Gr. Gesch. II. S. 349)

商業に關する
國家的統制

商業取引は決して自由では無かつた。殊にアッチカに於ては商業に就いての國家的統制が嚴重であつた。ソロンがアッチカのあらゆる農産物の國外輸出を嚴禁したと言ふ記事(Plut. Solon. 24)は誤としても、農産品は先づ自國の需要を満たすのが第一とされ、アッチカでは穀物其の他或種の物品の輸出は一切禁止されて居た。セリンブリヤ(Selymbria)でも、缺乏の際には穀類の輸出は禁止された([Aristot.] Oeconomica II)。穀類其の他の輸入に關しても様々の制限が設けられ、是は既に述べた様に(一六五頁)アッチカ帝國の成立と不可離の關係に立つて居る。前に觸れたやうに、アテネ人はヘレスポンツスに役人を派して、ポンツスからの穀物輸送を取締つた外、アッチカ住民にはアッチカ以外に穀物を輸送することを禁じ、又ビレウスに到着した船荷中の幾ばくを、

アテネ市に送る可きかも、詳しく規定せられて居た。

最後に吾々は金融業の發達に就いて述べ此の一章を結びたいのであるが、金融は五世紀から既に見る可きものがあつたとは言へ、特に四世紀にその發展が著しかつたのであるから、四世紀の章(二四六頁)に於て觸れることとして、これで五世紀の都市國家生活最高潮期の經濟生活の觀察を結び、次に當時の文化を窺ふ事としよう。

第九章 ギリシヤ文化の高潮期

第一節 文運の隆盛

五世紀は實にギリシヤ文化の高潮期であつて、それはペルシヤ戦役に於けるギリシヤの勝利と、密接な關係に立つて居る。空前の國難を撃攘し得たギリシヤ民族は、政治的に確固たる自由の基礎の上に立ち、東方の專制者の手から祖國を救うた神々への感謝の念に溢れつゝ、最早や東方の文化に倚賴することなく、かの民族獨白の天才を發揮して、古代文化の最高峰たる「古典時代」を現出したのである。ペルシヤ軍撃攘に大功あつたアテネ市が、其の後政治に於てのみならず、文化の方面に於ても、ペリクレスの自覺的指導の下に、全ギリシヤ人世界の文化的中心となつたのは、當然の結果であつた。實に五世紀の文化は、其の全體からみても、又個々の現れに於ても、もとアッチカの土地に發

『古典時代』の現出

五世紀文化のアテネ的色彩

生せず、否最初はアテネが熱心に排撃したもので、皆アテネ的色彩を帯びて居るのである(Meyer: G. d. A. IV. S. 87)。此處にはゆる『アテネ的色彩』の最も代表的なものとして、私は五世紀文化を貫く自由平等主義、民主主義傾向を挙げたい。後に述べる五世紀文化の各方面の代表者即ち哲學に於けるエンペドクレス(Empedocles)、史學のヘロドツス、悲劇のエウリピデス(Euripides)、修辭學のゴルギヤス(Gorgias)、ソフィストのプロタゴラス(Protagoras)等⁽¹⁾は皆此の雰囲気の中に生活し、エンペドクレス、ゴルギヤスの如きは、自ら民主主義者として故國の政治問題に關與したのであつた。

(1) プラトンの『プロタゴラス』(320C)によると、プロタゴラスはソクラテス等との對話に於て、民主主義を理論的に辯護して居る。曰く。

『他の人々も、またアテナイの人々も、建築或は他の技藝の徳に關して議する場合には、少数者が其の會議に與かるべきであると思考して居る。……儂も亦其は當然だと主張する。然るに政治的徳に關する會議に進む場合には、其の會議は全く正義(dike)の徳と思慮(sophrosyne)の徳とのみによつて運行すべきであつてみれば、彼等が如何なる人をも承認するのは當然である。其は何人も此の徳を具有してゐるのが當然であるからで、さもなくば

『都市は成立しえまい』と。(岩波版菊池慧一郎氏譯による)。

吾々はルネッサンス時代にも劣らず多面的な此の五世紀文化の中で、特にアッチカの特産とす可く、ギリシヤ文學の代表者である悲劇⁽¹⁾から語り初めよう。

六世紀の初コリントのアリオン(Arion)の發達せしめたヂチランブス(Dithyrambus)調の合唱叙情歌(Chorlyrik)に對し、アッチカのイカリヤ(Icaria)のテスピス(Theepis)といふ者が、イオニヤ系のイアンブス(Iambus)調を以て物語る『答辯者』(Hypokrites)を對立せしめ、ピストラツスの創めた五三四年のデオニシヤの祭に演じたのが、抑、悲劇の起原と言はれる。従つてそれは決して單なる慰安、又は享樂の具ではなく、嚴肅なる國家的儀式として興つたのであつた。比較的詳細に知り得るのは五世紀のエスキルス(Aeschylus)、ソフォクレス(Sophocles)、エウリピデス(Euripides)の三大悲劇詩人以後である。エスキルスに於ては俳優(Hypokrites) 前述の「答辯者」の發達せるもの)は僅か二人に過ぎなかつたが、ソフォクレスは之を三人に増し、更に背景を設けた結果、先輩エスキルスも之を採用した、エスキルスからエウリピデスまでの三人の作は、可なり現

悲劇の起原

三大悲劇家

エスキルス

存して居るが、其の内容は五世紀思想史を反映して頗る興味が多い。後年の傳へに依れば、エスキルスはサラミスの海戦に参加し、ソフォクレスは戦勝の祝賀の舞踏に加はり、

エウリピデスは戦勝の日に生れたと言ふ。三大詩人の面目を穿ち得て極めて妙である。

後の二人の話はいざ知らず、マラトンとサラミスの兩戦に自ら矛を執つたエスキルス(一四六頁)に於ては、勿論多神教は否定されなかつたが、全能にして正しき神ゼウスの信念が、其の作を貫く根本思想を爲して居る。ソフォクレスは戦勝がアテネに齎したあ

ソフォクレス

らゆる歡喜に與り、又自らアテネ市の最高官に就任し、其の作にはペリクレス時代の、

自由な、無邪氣な信仰が、殊に神の全能に對する人間の無力の思想が強く窺はれる。エ

エウリピデス

ウリピデスに至つては最早神々の世界は、十分の満足を與へなかつた。其の扱つた題材

は、矢張り在來の傳説であつたが、巧に人物、性格を變改し、其の作は全く現代的社會

問題を中心として居る⁽³⁾。彼を以て啓蒙運動の中心と見る考は正しく是認せらる可きであ

る。彼は忌憚なき筆を以て現實社會を描き、殊に婦人問題を重視して居るが、其の態度

はやがて祖國の神々の否定、人生に對する悲觀主義に陥る結果となつた。吾々は此の小

Tragos → Tragodia → Tragic
gady

第九章 ギリシヤ文化の高潮期

一九〇

冊子では、三大悲劇詩人の傑作の一つすら紹介することは出来ないが、読者は直接彼等の作を繙いて、此等の古典中の古典を心ゆく許り嘆賞せられたい。

(1) 新關良三氏著『希臘悲劇論』(二卷)は、悲劇の起原、演技の問題に就いての諸説を紹介し、劇詩人の作品を批判し、其の内容梗概を擧げて居る。悲劇に關する多くの文献は同書に就いて看られよ。悲劇と稱し得るものは、エジプト、バビロニヤ等の先進文化國に求めて見出し得ぬものである。此處にも亦ギリシヤ人の天分の豊かさが窺はれる(一一二頁)。しかも、同じ神話を扱った韻文がギリシヤ各地に作られたのに、悲劇が獨リアテネに興つたのは、それが全くデオニスス祭典に結びついて起つたもので、悲劇トラゴヂヤ Tragodia は、デオニススにさへぐる犠牲の山羊 (Tragos) の歌の義である。デオニススの祭は、アッチカでは年に四度あつたが、其の中三月頃の市のデオニシヤ祭が悲劇と密接の關係がある。此處では五世紀以來、三人の詩人が悲劇三篇、サチルス劇一篇を各一日宛上演して、賞を争つた。エスキルスは三篇皆脈絡あるものを作り、三部作(trilogia)を創めた。ソフォクレスは之に反し三篇獨立せるものを作つた。劇上演の費用は、各フィルの金持の負擔する所であつた(一六三頁)。コラスは時代とともに意義を失ひ、役者の科白が主となつた。役者は假面を着け、大きな高靴(Koturnos)を穿き、身長を大に見せて「英雄」を演じた。其の結果動作は緩慢、簡略で、

科白や歌謠を主眼としたらしい。

(2) 散佚したフリニクス (Phrynios) の『メントスの攻略』『フェニキヤ人』其他一、二を除くは、エスキルスの『ペルシヤ人』(Persians) が、歴史的事件を扱つた唯一の悲劇で、其の他は悉く傳説を扱つて居る。

(3) ソフォクレスはエウリピデスと己とを比較し、己は人間がある可きやうに彼は人間があるがまゝに描くと言つたと言ふ(Arist. Poet. 25)有名な言は兩人の立場を簡潔に物語つて居る。

悲劇と同じく、喜劇も亦デオニススの祭から發生した。合唱隊の獸假面、パラバシス(Parabasis) 一時所作を中止して觀衆に話しかけること、行列 (Komos) 之から多分Komoidia—Comedyの語は由來するらしい)等は、皆此の事實を物語つて居る。四八七年喜劇もデオニシヤの祭に採用せられることとなつた。シシリイのエピカルムス (Epicharmus) は、今日いはゆる喜劇を作つたが、アテネに於ては政治問題を扱ふのが、喜劇の仕事となつた。はじめクラチヌス(Cratinus)は、ペリクレスを盛に攻撃したので、劇の檢閲が行はるゝやうになつた。アテネ喜劇の第一人者は言ふまでも無くアリストファネス(Aristophanes)であつた。保守主義、平和主義者であつた彼は、エウリピデス、ソフィ

喜劇

アリストファ
ネス

第一節 文運の隆盛

一九一

スト、ソクラテス、過激民主主義者クレオン (Cleon) 等を續々刎上に載せ、ペロポネッス戦役の間を通じて、アテネ喜劇界の牛耳を執つて來た。其の外エウポリス (Eupolis) の名が傳はつて居るが、到底彼には及ばなかつた。然し此の政治的喜劇は其の性質上アテネ帝國がペロポネッス戦役により崩壊するや、永く其の生命を維持することが出来なかつた。即ち是も亦アッチカ帝國の自由の空氣に養成された特殊産物なのであつた。

韻文には此の世紀の初に、ピンドルスがあり(一一五頁)、シモニデス (Simonides)、バックヒリデス (Bacchylides)、コリンナ (Corinna) 等も抒情詩人として名があるが、總じて詩は最早過去のものとなつた觀がある。我々はむしろ散文に於て、見逃がす可からざる重要な産物を有つて居る。散文の發達には六世紀以來のイオニヤ其の他の自然哲學者や、後に述ぶるソフィストが、重大な貢獻を爲して居るが、此處では五世紀散文の二大作物、即ちヘロドツスとツキヂデスの歴史に就いて述べよう。小アジアのハリカルナッス (Halicarnassus) のヘロドツスは、若年の頃各地を遍歴して、風俗、習慣、歴史を採録し、之を講演してロゴグラフィオス (Logographos) として活動して居た。後年アテネに

散文

史家ヘロドツス

ツキヂデス

來て市民となり、ペリクレス等と交遊するに及び、かのペルシヤ戦役の歴史を、アテネの功業を讃へて書き上げんと企てた。執筆したのは彼が下イタリヤのツリイ (Thurii) 市に移住してからで、若年の頃集めた材料は、此のペルシヤ戦役史の中の諸處に織り込まれ、彼の態度が眞理の決定よりも、あらゆる傳承を正直に傳ふる所にあつた故、其の記述は純眞にして興味に富み、『第二のホメルス』の名に應はしい。之に對して殆ど同じ時代のアテネ人ツキヂデスの作に於ては、事件の中から歴史的に重要なものを選び出し、嚴正なる批判に照して記述し、其の文章もギリシヤ散文中の最も難澁なるものに數へられる。彼の作は『ペロポネッス戦役史』八卷であるが、かのアテネ、スパルタの交戦(次章参照)を一時期として把握したことが、既に劃期的であつた(二〇八頁)。近代の研究によると、此の作も亦一氣に書き上げられたものでは無く、各事件後に書かれた多くの斷片を戦役終局後に結合したものである。

註 ヘロドツス、ツキヂデスに就いては、原隨園氏著『ギリシア史研究』参照。

以上の文學的作品と並んで、實用的な技術に關する書も多く現れた。パルラシウス

各種の實用的著作

(Parrhasius)は繪畫に關し、イクチヌス(Ictinus)はパルテノン(Parthenon)に關し、ソ
 フオクレスは合唱に關し、各著作したと傳へられる。⁽¹⁾ 是等の中コス島の人ヒポクラテ
 ス(Hippocrates)の醫學に關する著述は今日に傳つて、彼の此の方面に於ける貢獻を物
 語つて居る。ギリシヤに於てもはじめ疾病はある超自然力の作用と考へられ、祈禱や醫
 神アスクレピウス(Asclepius)の宮への參籠等が行はれたが、アスクレピウス信仰の中
 心から醫學の發生を見た。クロトンのデモケデス(Democedes)が早く醫者として令名が
 あつたが、ヒポクラテス(四六〇頃生る)が出づるや、醫學に神祕主義の潛入すること
 を防ぎ、いかなる疾病も其の自然的原因を有する故、醫道はまづ人體の研究より出發す
 可しと喝破して科學的醫學の礎石を据ゑたのである。

(1) 五世紀に入つては既にアテネに本屋があつたことは、プラトール(Apol. 26e)が物語つて居
 る。當時醫學に關して様々な書籍が書かれたことに就いては、Xen. Memorab. IV. 2. 9 以下
 を参照

醫學と並んで數學も前代のピタゴラスの開いた道を進んで、キウス島のオイノピデス

Heracitus

(Oinopides)や、同島のヒポクラテス等盛名を馳せ、後者は幾何學の教科書を編纂した。
 天文學ではピタゴラスの地球球形説は、まだ時人に廣く信ぜられなかつたが、アナクサ
 ゴラス(Anaxagoras)は太陽がペロポネスより大なる(!)灼熱球體なること、月が太
 陽から光を受けて輝くことを説いた。然し古い信仰と相容れざる是等の主張のために、
 彼はアテネ市から追放されねばならなかつた。

過渡期文化の産物であつた自然哲學は、此の世紀に入つても多くの研究者を産んだ。
 彼等は相變らず演繹的、思辨的方法をとつたため、『宇宙の實體』に關して、多くの異説
 が出て、歸一する所を知らなかつた。此の世紀の初に屬するエフェススの貴族主義者ヘラ
 クリッス(Heracitus)には、可なり多くの斷片が残つて居るが、『暗き人』(Ho skoteinos)
 と綽名されたやうに、それ等は豫言的警句的で頗る難解である。彼の主張としては、萬
 有流轉説(Frg. A 6 Diels. Panta rhei 萬物は流る)が人口に膾炙して居るが、之と並ん
 で永遠不滅なる物質としての火(Pur aeizoon)の思想があり、永遠に萬物を支配する法
 則(彼のいはゆるロゴス Logos)の思想が、全體の中心を爲して居ることを忘れてはな

らない。ヘラクリツスとよく對比されるエレヤのパルメニデス (Parmenides) では、『實在者』(To eon) が根本思想を爲して居る。エトナ山に身を投じたと言はるゝアクラガスのエンペドクレス (Empedocles) は、火、水、氣、土の四元素説を立て、是等は『愛』と『憎悪』とによつて運動させられると説いた。クラゾメネー (Clazomenae) のアナクサゴラス(二〇八頁)は無数の分ち得る性質の異つた分子 (spermata) がヌース (nous、精神の義) により運動させられると説き、アブデラ (Abdera) のレウキップス (Leucippus) 及び其の弟子デモクリツス (Democritus) の原子説への橋渡しをして居る。デモクリツスは頗る博學であつたが、物質は同性質で異形不可分の微粒子の結合から成り、運動は此の粒子に内在すると説いて、科學史上に忘る可からざる足跡を遺した。

斯様に自然哲學者は各、自己の思索に基いて獨創の説を誇つて居たが、事實に於ては彼等の探究せんとした問題は、一つも十分の解決に達して居なかつた。此の自然哲學の行きづまりに對する一種の反動として、五世紀の半以來、青年をして『家事を治め、公共の事に關して十分辯じ活動せしめ得る』(Plato Protag. 318e) やうに教育するを職とす

ソフィストの
近代的教育

雄辯術

る一群の人々が現れた。いはゆるソフィスト (Sophistai, Sophists) が是である。彼等は哲學者と異り、一箇處に定住することなく、各地を遍歴して青年を教育し、報酬を得たが、其の教ふる所は、一言で盡せば『近代的教育』であつて、在來読み書き、體育、音樂のみに習つたギリシヤ青年に、民主政治の下にあつて市民としての自己を主張するに必要なる徳 (Arete) を授くるを目的とし、其の結果思考推理と、他人を説得するに足る雄辯術、乃至修辭術が、最も重要な課目と考へらるゝに至つた。彼等には眞理に對する要求、尊敬なく、其の重んずる所は何を語る可きかに非ずして、いかに語る可きかに在り、弱き論を變じて強き論となす法に在つたが、ソフィストを以て直ちに詭辯家と考ふるのが誤れることは、グロートの研究以來明かになつた。ソフィストは決して一の教團ではなく、時勢の必要に應じて、ギリシヤ人世界の各處に其の出現を見たが、中心は矢張りアテネであつた。且つ彼等がプロタゴラス (Protagoras) を除くは、皆アッチカの散文を用ゐたことは、アッチカ語の形成に、重大な關係があつた。最初自らソフィストと名乗つた人はアブデラ (Abdera) のプロタゴラスであつた。彼に歸せられて居る有名な句『人

プロタゴラス

Man is the Measure
of all things.

は萬物の尺度也。有る事に就いては有りと言ふ事の、有らざる事に就いては有らずと言ふ事の』(Frg.1)が果してプロタゴラスの言であるか否かに就いても又「人」(Anthropos)が「個人」の義か「人間種族」の義かに就いても異論があるけれども、通常彼は認識の主観性を説き、絶対真理の存在を否定したものと考へられてゐる。之から進んで道徳律、國法、宗教が、相對的價値を有するに過ぎぬと説かれるのも自然の勢であつた。

此の宗教の問題に關して一言する。五世紀の初期にはギリシャ本土に於て、殊に『神を畏るゝアテネ』市民には、ペルシヤ戰役の奇蹟的勝利が、一層神々への畏敬を深めたのであつた。エスキルス作品も、後に述ぶる多くの藝術的作品も、皆此の雰圍氣から生れたのであつた。しかし悲劇の部で既に觸れたやうに、オリンプスの神々への信頼は、エウリピデス時代には、若き人々の間には聊か動搖を始め、一方には小アジア、トラキヤ、リビヤの神々も、ギリシヤに入つて來て居たのである。此の一種の『啓蒙運動』を、ソフィスト等の相對主義が一層助長したことは容易に察せられる。此の間の消息はアテネの政治家クリチヤス(Critias)の『神々は政治家が人々の罪過を犯さざるやう作り出したるもの也』と言ふ有名な句を讀めば、思半に過ぐるものがあらう。

其の他ソフィストとしては博學多藝のエリス(Elis)のヒッピヤス(Hippias)、修辭術を創始せるシシリイのレオンチニ(Leontini)のゴルギヤス(Gorgias)、倫理的教訓を重んぜるケウス(Ceus)島のプロディクス(Prodicus)、カルケドンのトラシマクス(Thrasymachus)、アテネのアンチフォン(Antiphon)等の名が擧げられる。

(1) Grote: History of Greece. Chapt. LXVII. ソフィストといふ語の誤解は、プラトー及びアリストテレスが元來「智者」を意味する此の語を「報酬を求むる教師」乃至「智を銜つて金を取る者」と言ふ様な特別な悪い意味に用ゐたに由來する。ソフィストの主張はプラトーのプロタゴラス(岩波文庫菊地慧一郎氏譯)に窺はれる。

(2) 波多野博士著、ギリシヤ宗教思想史二六八頁以下による。

此のソフィスト主義は教養を求むる青年等の間に、非常に歓迎せられたが、一方には激しい反對者を見出した。其の先頭に立つてソフィスト克服に全生活を捧げたのが、かのソクラテス(四七〇—三九九)である。ソフィスト克服がソクラテスの出現の因であつたと考へる時、吾々はソフィストの文化史上に於ける重大な貢獻を悟るのである。彼も恐

ソフィストの
敵ソクラテス

らく自然哲學者の書を読んだであらうが、それは到底彼を満足させることができなかつた。彼の目的はソフィストに誤まられた青年を導いて、善い市民を作り出すにあつたが、ソフィストのやうに、自分が智識を有すると主張し、之を人々に賣りつけたのではなく、途上に會ふ人々に、歸納的、辯證的方法によつて、彼等の自負する智識がいかに不確實なものであるかを悟らせた。かくて彼はソフィスト等によつて弘まつた相對主義の迷誤を打破し、道徳的『善』の概念を確立したのであつた。ソクラテスは祖國の熱愛者であつた。彼は愛するアテネ市民を其の理想に向けて導かうと試みたのであつたが、事實は道徳的概念の論議によつて、後世の倫理學、哲學の始祖となつたのである。

彼が平生主張せる如く、國法を重んじて毒杯を仰いで從容死に就いたことは、世間周知の事實である。

第二節 造形美術の進歩

五世紀の最初の二十年位は、造形美術に於て『過渡期』の章に述べた『古拙風』の完成期

ペルシヤ戰役
後の美術

フィヂヤス

ミロン

である。(二二六頁以下参照)。其の次の二十年は既にペルシヤ戰役の齎せる大飛躍の影響を示し、次の古典期への過渡期を爲して居る。此の時期はペルシヤ戰役の勝利に就いて神々に感謝の奉獻物が捧げられ、又毀られた諸市が再興された時期であつたから、建築や彫刻の需要が、急激に盛となつたと考へられる。此の時代の代表的建築は、オリンピアのゼウスの神殿(四五年以前)で、破風とメトローペの人物像を以て名高い。内陣に安置された偉大なゼウス像は、巨匠フィヂヤスの作で黄金と象牙とを張つたものであつた。アテネではカラミス(Calamis)の名が聞えて居た。最近デルフィで發見された青銅製の御者の像は、多分カラミス一派の作風を示すものであらう。是は競技の優勝者の像を立てる習慣が起つたので作られたものである。フィヂヤスはまだ若年の頃に、既にマトンの勝利を記念する群像(ミルチャデス及び神々)を作つて居る。最も有名なのはアチカとボエオチャとの境のエレウテレー(Eleutherae)から出たミロン(Myron)の、彼は瞬間的動作を把へるのに、特に長じてゐた。彼の作では、著名な圓盤投者やマルシヤス(Marsyas)の像の模作が残つて居り、原作の生氣躍動せる趣を偲ばせる。西方でも矢

ポリグノツス

張りカルタゴ人に對する勝利が、飛躍を齎らした。アクラガスでは巨大なゼウス神殿(Pseudo-Peripteral 式)が建立せられた。彫刻家としてはレギウムのピタゴラスが令名があつた。繪畫ではタスス島から出たポリグノツス(Polygnotus)が優れて居た。彼の地位は彫刻に於けるフィヂヤスのそれに當ると言はれる。其の作として、デルフィのクニヅス(Cnidus)人の休憩所とアテネの壁畫館(Poikie)の壁畫とが、パウサニヤスにより記されて居るが、實物は勿論存しない。彼は在來用ゐられた赤白黒の三色に、黄色使用を加へたと言はれる。

いはゆる『古典藝術』の時代は、ペリクレスの名と密接に結び付いて居る。ペリクレスが平和政策を執り、デルス同盟の資金を移して、都市の美化に努むるやうになつてから、ヘラス中のヘラスたるアテネには、多數の藝術家が集つた。ペリクレスが長城を以てビレウスとアテネとを連絡してから、アクロポリスは在來の山城の意義を全く失ひ、アテネ市守護の神々を祀る場所となり、神像(アテナ・プロモロス Athena Promachos、アテナ・レムニヤ Athena Lemnia)や、神殿建築を以て飾らるゝに至つた。先づ四四七

パルテノン

年にはパルテノン(Parthenon 處女アテナの神殿の義)が、イクチヌス(Ictinus)とカリクラテス(Calliocrates)との指揮の下に起工され(イオニア式を加へたドーリア式)、四三八年にはフィヂヤスの傑作たる黄金と象牙とで張られた女神アテナ像が安置せられた。此の莊嚴な神像は後世の模作が残つて居り、楯を有つて立つた原作の面影を窺ふことは出来るが、悲しい哉かの天才の神韻を傳ふるに足らない。吾々はむしろ此の神殿のメトープ(欄間)、(神話に於けるアマゾンとギリシヤ人との戦其他)、フリース(内室 Cella)の壁の上部を取まいて居る、パンアテナイヤ祭の行列圖)、東西破風(東はアテナ女神の誕生、西はアテナとポセイドンとのアツチカの地に就いての争の圖)に幸に残つて居る浮彫で満足せねばならない。是等は恐らくフィヂヤス自身の作ではあるまいが、少くとも彼の意匠に出でたものであり、彼の作風を十分に示すものと考へられる。フィヂヤスこそは莊嚴沈重を其の作の特色とし、かの女神の叡智と優美とを始めて完全に表現したギリシヤ彫刻家であり、神像は彼によつてそれ以上を望みがたき完成の域に達したのである。四三七年には此のアクロポリスの神域の門(Propylaea)が、ムネシクレス(Mnesicles)

フィヂヤスの作風

アクロポリスの門

の指揮の下に起工された。之はドーリヤ、イオニヤ兩式の混合であつた。其の傍に建てられたニケ(Nike)の小祠は、カリクラテスの設計に係り純イオニヤ式で、其のフリースの浮彫は今もなほ存し、頗る優美な作である。アテナ・ポリヤス(Athena Polias)とポセイドン・エレクテウス(Poseidon Erechtheus)を祀つたエレクテイウム(Erechtheium)はペロポネスス戦役中に出来たもので、カリアチダイ(Caryatidae)の列像を以て柱身に代へたのが有名である。

以上はアテネのアクロポリス丘上の建築であるが、丘下の部も色々の建築で飾られた。⁽¹⁾丘の南麓のオデイウム(Odeium)や、今もよく保存されてゐるドーリヤ式建築のいはゆるテセウスの宮(Theseium)などがそれである。イクチヌスの設計にかゝるエレウシスのテレステリウム(Telesterium)も、亦此の頃出来た。なほピレウスの港市は、ペリクレスの發意により、ミレツスの名技師ヒッポダムス(Hippodamus)が新に設計して、彼の母市と同じく、こゝにも碁盤目の整然たる道路を作り、其の面目を一新した。

(1)是等の建築の爲に投ぜられた金額は總計すれば夥しい高に上らう。(古典は二〇一二タレント

エレクテイウム

アクロポリス
丘下の諸建築

と言ふ額を Propylaea だけに使つたと傳へて居るが、是はアクロポリスの全建築の費用であらう(Beloch: Gr. Gesch. II² 1. S. 111)その事業の一部は前にも述べたやうに、自由民に生業を與ふる爲に起されたのであつたが、かやうな神殿、神像の如く全く非生産的なものに、國庫の重要な部分を注入したことは、財政的には決して得策ではなかつた。たとへそれは直接アテネ人の膏血ではなかつたにせよ、アテネ人は自國の經濟を犠牲にして、その天稟を後世に傳へたと言ふ考も存しう。(Cunningham, Western Civilization in its Economic Aspects. Ancient Times. P. 120—121)

なほ此の世紀の後半には、建築に於て一つの新様式が現はれた。それはアカンツス(Acanthus はなすぶ)を柱頭裝飾に用ゐたことで、いはゆるコリント式建築が生れた。此の式の最も古い例は、イクチヌスによつて設計された、アルカヂヤのフィガレイヤ(Phigaleia)の神殿である。

又繪畫の方面では、アテネのアポロドルス(Apollodorus)が、陰影法(Skiagraphia)と遠近法とを創め、やがてイオニヤの巨匠ゼウクシス(Zeuxis)とパルラシウス(Parthasius)が之を完成した。後者は更に人物像に、様々の表情を現はすことを試みたと言はれる。

コリント式建築
繪畫の進歩

第十章 ペロポネッスス戦役

第一節 アルキダムス戦役とニキヤスの和約

アテネ、スパルタ兩國は四四六年に和約を結んだけれども、それは永續せず、十五年後には兩國は各其の同盟諸市と共に起つて雌雄を決することになった。其の根本の原因は、前にも述べたやうに(一一二頁)、古來ギリシヤの第一國と見做されて居た貴族主義的スパルタに對し、民主主義のアテネが急に擡頭して、瞬く間にエーゲ海世界に帝國的支配の手を伸べたことに存する。其の事情は近世の大英帝國に對するドイツの蠶食が、世界大戰を惹起したのと著しい類似を示して居る。但し後の場合にボスニヤ事件を發端とする戦責問題が生じたやうに、ペロポネッスス戦役にも誘因と見做す可きものがある。イオニヤ海のコリント植民地であるコルキラ(Corcyra)とコリントとが、兩市合力の植

戦役の遠因

六の近因

民市たるエピダムヌス(Epidamnus)市の内訌に關係して相争ふことになり、コルキラがアテネの後援を求めたため、コリントは勝つ筈だったシボタ(Sybotia)の戦(四三三)に敗れた。さなきだにアテネの擡頭により、西海に於ける己の勢力範圍を脅かされて來たコリントは、復讐のためアテネより離叛せるポチデヤ市に應援した。ペリクレスはアテネの國威を保つため、ペロポネッスス同盟のメガラ市に對し、アテネ市及びデルス同盟の一切の市場を封鎖する決議を通過せしめ(いはゆる『メガラの決議』The Megarian Psephisma)たので、ペロポネッスス同盟の盟主たるスパルタも、遂に争の渦中に捲き込まれた。スパルタでは王アルキダムス(Archidamus)等は、熱心に平和を説いたが、青年派の主戦論が勝を占め、アテネに戦責を嫁するため、法外な要求——ペリクレスの追放、『メガラ決議』の撤廢、デルス同盟解散等——を提出した。ペリクレスは勿論之を拒んだ後、四四六年の決議にしたがひ、仲裁々判を求めようとしたが、スパルタ側は之を容れず、遂に『ヘレネスをアテネの支配より解放する』といふプロパガンダの下に、アテネとの戦を開始したのである。

(1) 此の戦役の責任を主としてペリクレス一人に嫁する考が古くから行はれて居る。既にアリストファネス(Friedensfest. 605以下)に見え、エフォルス(Diodorus XII. 40. 6)も之に似たがふ。之によると、ペリクレスは晩年の彼に對するアテネ市民の非難—アナクサゴラス、アスパシア(Aspasia. 彼の妾)の如き啓蒙家との交遊、フィヂヤスの不正に對する責任、彼の反民主主義的態度に對する急進民主主義者の攻撃等—に對し、民心を外部に向けんがために此の役を起したと言ふ。Beloch(Gr. Gesch. II² 1. S. 293)も亦此の見解をとつて居るが、當れるか否か疑はしい。ツキヂデスは此の見解を誤れりとし、此の一戦が過去の永い歴史の堆積の結果と考ふべきことを主張する(Thuc. Vol. 1.)。彼によれば(II. 59)開戦後間も無く、アッチカ農民は、市城壁内に閉ぢこめられ、アッチカはスパルタ軍に荒掠され、ペリクレスを開戦の張本人と怨んだとあるが、ペリクレスも此の結果は當然豫想して居たらう。又彼は開戦に際し決してアテネの勢力擴大を望む可からざる事を説いて居る(Thuc. 1. 144)。即ち彼はギリシヤ史の進みを透察してデルス同盟維持のためにはスパルタとの一戦の避く可からざるを知り、一大決心を以てアテネ市民を激勵しつゝ開戦したと考へるのが穩當であらう。

アルキダムス
戦役

戦役最初の十年間は、スパルタ王アルキダムスが屢アッチカに侵入したので、此の名で呼ばれる。ペリクレスの戦略は、陸軍では到底スパルタ及び之に屬するペロポネッス

ペリクレスの
作戦計畫

軍に敵し難いから、アッチカ農民を悉くアテネ城壁の内に避難せしめ、海軍を以てラコニヤ海岸の要地を荒掠し、持久戦でスパルタを疲弊せしむるに在つた。スパルタはペロポネッス(アルゴス、アケーヤを除く)の他、ボエオチヤ、マケドニヤを味方にし陸軍の兵數に於ては優勢であつたが、財政では到底アテネの比で無かつた。アテネは毎年の同盟市献金の他、アクロポリスには約六〇〇〇〇タレント(約千四百萬圓)の蓄財があつたのである。

戦は四三一年春テーベの、仇敵プラテーエーに加へた襲撃に始まり、スパルタ王アルキダムスは果然アッチカに侵入した。アテネ側は計畫通り海軍を出し、相當成功を収めたが、開戦第二年目に東方からペストがアテネ市内に侵入したので思ひがけない災禍を蒙つた。狭い城壁内に多數の人々が立籠つて居たので、疫病は思ふ存分蔓延し、四三〇、二九、二七の三年に互つて、アッチカ人口の三分の一を奪つたと言はれる。市民は此の大災厄に當面して、ペリクレスを攻撃し、彼は一時其の職を失ふに至つた。又彼等はスパルタに和約を請うたが成らなかつた。しかしアテネにとつて、否ギリシヤ民族總體にと

第一節 アルキダムス戦役とニキヤスの和約

死
ペリクレスの

つて償ふ可からざる損失は、此の危急の時に當り、悪疫がペリクレスをも浚つて行つたことである(四二九年)。此の偉大な政治家の死は、やがてアテネの没落を意味したからである。今や軍才も無く、政治的手腕も乏しい黨人らが、互に民衆の歡心を求めて政權を争ふやうになり、軍略の事まで一々民會に懸けらるゝに至つた。ペリクレスを失つたアテネ民主政治は、富裕なる皮革商クレオン (Cleon) やランプ製造業ヒペルボルス (Hyperbolsus) 等の急進民主主義者や保守的平和主義のニキヤス (Nicias) の下に動いて行つたが、是等無見識なるデマゴゴス (Demagogos 原と『人民指導者』の義だが、煽動政治家の義に用ゐらる) は、勝つべかりし此の戦役を母國の降服に終らしめたのである。

ペリクレスの死後も彼の方針に従つて、戦は續けられた。四二八年にはレスブス島がアテネに離叛を試みたが、次の年鎮壓され嚴罰を受けた。四二五年になると、戦局はアテネに頗る有利になり、將軍デモステネス (Demosthenes) はメッセニヤ海岸のピルス (Py-lus) (今日のナヴァリノ灣の一部) を占領し、同灣のスファクテリヤ (Sphacteria) 島に敵の約四百名(其の中百八十人はスパルタ人)を封鎖することに成功し、ペリクレスの方針を

ピルスの封鎖

平和談判決裂

見事に實現したのである。スパルタは兵員を損失し、又アテネ軍がピルスからメッセニヤのヘロットを煽動するのをおそれたため、開戦前の領土維持の條件で媾和し、更にアテネと攻防同盟を結ぼうと申し出た。此の思ひがけぬ好機に際して、デマゴゴスのクレオンは、法外にも、平和の代償として、四四六年和約の際、アテネがスパルタへ引渡した土地を返すようにと主張し、遂に談判を破裂させて、掌中の珠玉を逸したのであつた。

其の後デモステネスは遂にピルスに居るスパルタ軍を降服させた。此の貴重な人質を取られたスパルタは、アッチカ荒掠中止を約さねばならなかつた。此の事件以來、アテネでは漸く侵略主義が主張され、クレオンは此のために同盟諸市の献金を千タレントに引き上げ、陪審者の日當を二オボロスから三オボロスに高めた。然しボエオチヤに對する攻撃は、デリウム (Delium) に於けるアテネ軍の大敗となり(四二四)、シシリイに對する干渉計畫も失敗に歸した。

此の頃スパルタには將軍ブラシダス (Brasidas) が出し、頗る優れた戦略を示した。彼

は四二四年秋、軍を率ゐて、大膽にも中部ギリシヤを縦走して、カルキヂケに出で、此の方面のアテネ勢力の中心であつたアンフィポリス (Amphipolis) を陥れ、アテネの同盟諸市に對し、同市の支配からの解放を宣言したので、トラキヤ方面の諸市は、大部分アテネから離叛することとなつた。史家ツキヂデスは、此の時タスス島から出發して、アンフィポリス救助の任に當つたが間に合はなかつた。そのために彼は追放の憂目に遇つた。アテネではデリウムの敗戦以來重々くの失敗に、攻撃主義の不可が漸く感ぜらるゝやうになり、⁽¹⁾ 他方スパルタはアンフィポリスを握つて居つたので、双方に平和の氣運が動き、四二三年一時休戦となつた。然し間もなくアテネでは諸方の形勢が、有利と見えて來たので、主戦派が再び擡頭し、クレオンを將軍に選び(四二二)、之にトラキヤ鎮定を委ねた。初め暫くは、彼も相當の戦績を擧げたが、アンフィポリスの戦で、鬼才ブラシダスに完全に破られて戦死した。然し相手のブラシダスも亦戦死したのは、スパルタに取つてかけがへのない損失であつた。

(1) 極端派が無謀な主戦論をつゞけて居る間にも、平和の要求はアテネ市民の間にも中々熾烈

であつた。殊にアテネ、スパルタ兩國とも夷敵ペルシヤと同盟して軍資金を得るに汲々として居たのは、アリストファネスのやうな保守的な人々をして苦々しく思はせた。這般の事情はアリストファネスの『アカルナイの人々』(四二五年上演、60—110行)『平和』(四二一年上演)『テスモフォリア祭の婦人』(360行以下)等に明瞭である。

今や漸く平和への道が開けた。アテネではニキヤスの主張が認められ、スパルタの方でも王プレイストアナックス (Pleistanax) の説が通つて、色々反對派の策動があつたに拘はらず(四二一年春)、いはゆる『ニキヤスの和約』が出來、兩國とも原則として捕虜及び侵略地を相手に返し、五十年間互に平和を破らないことを約した。此の和約は大體から見て、アテネに取つて頗る有利であつた。若し此の通り和約が履行せられたならば、ペリクレスの開戦の目的たる『同盟の維持』に、完全に到達するわけであつた。

第二節 シシリヤ遠征とアッチカ帝國の末路

ニキヤス其の他の努力で出來た此の和約も、其の實行には大きな困難を伴つた。スパ

平和條約不履行

ルタは到底アンフィポリスを返還することが出来ず、アテネも其の占領地を放棄しなかつた。殊に此の和約履行に依つて其の領土を失はねばならなかつたコリントやボエオチヤは最初から和約を承認しなかつた。そこでスパルタは窮境に立つた餘り、アテネと防禦同盟を結ぶに至つた。之にはアルゴスとの三十年の和約の期限の切れたことが、重大な關係があつた(一五五頁)。アテネは此の思ひがけぬ幸福な形勢に面して、スファクテリヤ其の他の地にある捕虜をスパルタに返した。

此の時クレイニヤス(Cleinias)の子アルキビヤデス(Alcibiades)といふ者がアテネに出て、平和主義者の一切の努力を水泡に歸した。彼はペリクレスの親族で、其の家で養育され、明晰な頭腦を有し、ソクラテスの弟子であつたと傳へらるゝにも拘はらず、當時アテネに行はれたソフィスト派の影響を受け、其の非凡の才能を、専ら自己一身の榮達に用ゐて他を顧みなかつた。四二〇年法定の三十歳に達して將軍に選ばれるゝや、彼は忽ち其の處世主義を發揮しはじめた。彼はニキヤスを敵として居た結果、急進民主派と結託してスパルタを遠ざけ、アルゴス、エリス、マンチネヤ其の他と百年期の防禦同盟を結

アルキビヤデスの出現

平和再び破る

んだ。そこでスパルタはコリントと同盟し形勢は遽に險惡となり、茲に平和は再び破れ、四一八年マンチネヤ(Mantineia)の戦で、アテネ、アルゴス軍は全滅してしまつた。アルキビヤデスは、自己の策が失敗したので、身の危険を感じ、遽に態度を變じてニキヤスと結託し、民主派の領袖たるヒペルボルスをおストラキスモスで追放した(四一七)。此の不合理極まる悪用以來、此の制度は最早や行はれなくなつた。

丁度此の頃シシリイでは、アテネと同盟せるセゲスタ(Segesta)市が南方の敵セリヌス(Selinus)市と争ひ、アテネに救援を求めた。アルキビヤデスは之を絶好の機會と考へ、以前の急進民主主義者の主張のやうに、アテネ同盟市の敵セリヌス、シラクサのみならず、シシリイ全島を征服し、出来るならばカルタゴをも征伐して、アテネの支配の下に一大帝國を建設し、自己の野心を満足させようと夢みた。此の計畫たる、其の目的は強がち非難すべきでは無かつたが、當時のアテネの實力と、アルキダムス戦役後の民力休養の必要等を冷靜に考へれば、其の疎大無謀なること火を見るよりも明かであつた。ニキヤス等は勿論之に反對を試みたけれども、シシリイ島の大きさや、國力の如何等を

シシリイ遠征の動機

瀆神事件

殆ど辨へない民衆は、此の花々しい計畫に賛同して、案を通過させたのである(四一六)。然るに四一五年春、遠征隊が將に出發しようとする時、或朝アテネ市内のヘルメス(Hermes)神の像が破壊されて居るのが發見され、忽ち大騒ぎとなつた。犯人嚴探の中にアルキビヤデスが嘗てエレウシスの祕法(一一六頁)を嘲笑したことが密告されて、嫌疑が彼の一派の上にかゝつた。彼は早速取調べを求めたが、それは遠征終了の後まで延期といふことに決した。

遠征隊の出發

こんな不吉な事件が起つたけれども、大規模の遠征隊―百三十四隻の三段權船と六千の兵員から成る―は出發した。指揮者はアルキビヤデスの他、ニキヤスとラマクス(Lamachus)の二人であつた。アルキビヤデスの計略は、シシリイの都市を出来るだけ多く味方に引入れて、シラクサを討つのであつたが、シシリイの諸市は、アテネ遠征軍の目的が結局全島の征服にあることを察したので、カタナ、ナクススの二市を除いては、皆冷淡であつた。しかるに遠征隊が出發した後、アテネに於ては、アルキビヤデスの反對派が民會を動かし、直ちに彼を召還する決議をした。遠征隊が僅かにシシリイ島に近づ

アルキビヤデ
スに對する判
決

いた時、彼はカタナの沖から召還の使に連れ歸られたが、途中巧みに逃亡したので、アテネ民會は缺席裁判で、彼に死刑を宣し財産を沒收した。彼は其の時アテネの不俱戴天の敵なるスパルタに身を投じてゐたのである。之は正しく彼一流の個人主義からの行動であつた。

シラクサ攻撃
の失敗

シシリイ遠征隊はシラクサ攻撃にかゝつたが、成功の見るべきものがなかつた。シラクサはヘルモクラテス(Hermocrates)の指揮の下に、武備を整へ、又スパルタに求援した。次の四一四年アテネ軍は市の西端のエピポライ(Epipolae)の丘を占領し、市と西部との交通を遮斷するために、二重壁を築き始めたが、シラクサ側も之に對抗して防壁を築いた。其の後アルキビヤデスの建策により、スパルタから名將ギリッパス(Gylippus)が送られ、包圍軍の間隙からシラクサ市に入るや、シラクサ軍の士氣頓に振ひ、ニキヤスは遂にアテネに救助を求めねばならなかつた。そこでデモステネスが救助に出たが、一度ギリッパスを得たシラクサの軍は、港の南端を爲すプレンミリウム(Plemmyrium)を奪還し、夜戦をなしてデモステネスを大敗せしめた(四一三年七月)。アテネ軍に取つて

遠征隊の末路

は最早一刻も早く包圍を解いて歸國する他なかつた。然し偶、起つた月蝕のために、荏苒時を失ふ中、港からの脱出も不可能となり、アテネ軍は西方内地へと活路を求めたが、途中でシラクサ軍の攻撃に潰滅し、ニキヤス、デモステネスは殺され、捕虜となつた者は石切場の中に押し込まれて餓死の運命に遇つた。かくて非常な熱狂を以て計畫せられた遠征も、測る可からざる大損害以外何物をも齎らさないで終つたのである。

アテネへの災厄は決して遠征の出先のみに留まらなかつた。スパルタに逃れたアルキビヤデスはこれまでのやうに、スパルタ軍が漫然アッチカに侵入することの不利を説き、アテネの北二十哩、アテネと北方との交通要點なるデケレヤ (Decelea) を抑ふことを勧めた。それで四一三年春スパルタ王アギス (Agis) は此處を占領した。之がためエウボエヤ島からアテネへの輸出は完全に封鎖され、スパルタ軍は此處を中心にアッチカ全土を支配し、やがてアテネはラウリウム銀坑の採掘も不能となり、其の財政は致命傷を受けた。アルキビヤデスの此の奇策が、いかにアテネを悩ましたかは、實に想像に餘りあるのである。

①
スパルタのデ
ケレヤ占領

アテネの北
二十哩

アテネ同盟諸
市の離叛

シシリイ遠征はアッチカ帝國の崩壊、延いてはギリシヤ民族衰頹のために路を開いたものであつた。是より先、アテネは同盟市からの献金を免じ、1/20 税 (ekoste) を同盟市の輸出入品に課して其の代りとしたが、シシリイ遠征失敗後、同盟市は續々離叛し、イオニヤでは僅かにサムス一島だけが依然忠實であつた。此の頃アテネは更に新しい強敵を加へることになつた。それは先に民主主義のアンドロクレス (Androkles) や、ピサンドルス (Pisandrus) 等がヘルシヤ大王に謀叛した知事アモルゲス (Amorges) を後援して、カリヤスの和約 (一五六頁) を破つたので、ペルシヤのダリウス二世は知事チッサフェルネス (Tissaphernes)、ファルナバズス (Pharnabazus) をして、イオニヤのギリシヤ人の諸市から税を取立てさせたが、是に至つてスパルタはアルキビヤデスの献策に従ひ、アジヤ沿岸の同胞を放棄し、其の代り自國の艦隊乗組員の給金を大王に支拂はせ、ペルシヤと結託してアテネに當るやうになつたのである。そこで之から戦争は主としてイオニヤ方面で行はれることになつた。

シシリイ遠征に巨費を費し、同盟諸市の離叛で貢金納らず、財政窮迫してアクロポリ

第二節 シシリイ遠征とアッチカ帝國の末路

スパルタとペ
ルシヤとの結
托

スの最後の豫備金まで手を着けたアテネでは、急進民主主義者の盲動で、此の上の失敗を招かないやうに、長老の中から十人の『下相談役』(Probolioi)を設け、五百人會及び民會を牽制せしむることにした。一方アルキビヤデスは、其の素行の放縱なため、スパルタから疎んぜられたが、故國アテネが自己の策に依り困窮の極に陥つたのを見、歸國の時機が近づいたと思ひ、先づ故國に寡頭政治を起し、次いで自ら之を仆し、民主政の回復者として歸國を全うせんと企てた。彼の計畫は圖に當つた。アテネ市では寡頭主義クラブの聯合活動によつて、次第にテロリズムが行はれ、遂に四一年夏三十名の『準備委員』が任ぜられ、次いで政權を五千名の市民に限ることが強制的に決議された。更に此頃極端寡頭主義者となつたピサンドルス (Pisandrus) は、四百人から成る會議を起し、之に最高行政權を委ぬる案を主張し、遂に其の通過を見たので、クリステネス以來の民主政治は一時廢止の運命にあつた。此のいはゞ革命的な變革が、アテネ市では暴力と脅嚇とにより遂行を見たが、サムスを中心とするアテネ軍は、飽くまで民主政治に忠實で、やがてアルキビヤデスと結託したので、彼は果して民主政治の擁護者と名乗り出

た。四百人會議は使を派してサムス側を説いて身方にしようとしたが失敗した。彼等は先にスパルタに和議を持ち出したが、是も成らず、肝腎の軍隊には認められないで行き悩んでゐるとき、偶、アテネの給養に最も重要なエウボヤ島を失ひ、剩へビザンチウムやダルダネルス海峡の諸市が離叛したとの報が傳はつたので、遂に政權を維持し難くなり、四箇月にして解散となり、テラメネス (Theramenes) の下に穩和寡頭政が復歸し、政權は武装し得る市民五千人に歸した(四一年九月)。此の頃アテネ海軍は、アルキビヤデスの力で、キノッセマ (Cynossema) の海戦に勝ち、四一〇年春にはアルキビヤデスは、キジクス (Cyzicus) の戦で再び大勝を博し、ボンツス地方からの穀物輸送を確實にしたので、スパルタの方から和議を申出た。然るに此の頃クレオフォン (一五九頁) に率ゐらるる急激民主主義が再び擡頭し、民主政が復興したが、彼は愚にもクレオンの轍を踏んで當時のアテネにとつては、勿怪の幸なる和議の申込を拒んでしまった。短見無識の民主主義者が、アテネ帝國の崩壊に、いかに重大責任があるかは、是等で明らかである。

其の後戦争は主としてヘレスポント地方で続けられたが、アルキビヤデスはカルケド

ン (Chalcedon)、ビザンチウムを征服し、それ等の功勞によつて、四〇八年、八年振で故國の土を踏むことが出来た。彼が歸國するや、市民は以前の彼の行動を一切忘れたかの如く、熱狂して歓迎し、海陸に於ける絶対統帥權を委ねた。

此の頃スパルタはスサ (Susa) に使を派して、ペルシヤ大王に對しスパルタの勝利がペルシヤに有利なることを力説した結果、大王も意を決し今までより遙に巨額の金を支出し、艦隊も造つてスパルタを援けることになつた。アテネは結局此のペルシヤの金力のために敗北したのである。スパルタは帝國主義的野心家リサンドルス (Lysandrus) を水師提督となし、小アジア沿岸へと送つた。之に對しアルキビヤデスがアテネ艦隊を率ゐて出動したが、四〇七年エフェスス附近のノチウム (Notium) の海戦で、アンチオクス (Antiochus) の率ゐたアテネ艦隊が、リサンドルスに破らるゝや、アルキビヤデスは忽ち失脚して、トラキヤに逃れ、四〇四年スパルタの刺客の手で其の波瀾極りなき生涯を終へた。

リサンドルスに代つたカリクラチダス (Callieratidas) によつて、アテネ艦隊がミチレ

ペルシヤの
スパルタ援助

アルキビヤ
デスの末路

アテネ最後の
奮闘

ネ港に封鎖せられてから、アテネ市民は一大決心を以て祖國救済のために奮起し、アクロポリス神殿の神寶まで鑄潰して、百十隻の艦隊を新造し、レスブスの南のアルギヌサイ (Arginuse) 島に於てカリクラチダスの艦隊を全滅せしめたが、暴風のために味方の兵員を多く失つた。此の敗戦の結果スパルタは又もや和議を申込んだが、クレオフォンは今度も又法外な要求をして之を決裂させた。こゝに於てリサンドルスは、提督アラクス (Arcus) の祕書として、再度スパルタ海軍を指揮し、デケレヤ占領を完全に有効ならしむるためには、ヘレスポント封鎖の必要なるを知り、此の方面に出動して、有名なエゴスポタミ (Aegospotami) の戦で、アテネ艦隊百八十隻の中百二十隻を奪ひ、決定的勝利を得た(四〇五年秋)。之によつてアテネの同盟市はサムス以外盡く離叛し、アテネの陥落は唯、時の問題となつた。

かくてアテネは海陸からスパルタ軍に包圍されたが、民主主義者等は在來の主張に基き、容易に降服しようとしなかつた。然し飢餓が次第に迫つて來たとき、市民は戦敗の原因の多くが、クレオフォン一派の無謀に基づくことを悟つて、遂に彼を死刑に處した。

エゴスポタ
ミの戦

アテネの開城
アッチカ帝國
の崩壊

之に代つてテラメネス一派の穩和寡頭主義が政權を握り、開城してスパルタに使し、ペロポネスス同盟諸市代表とともに媾和の談判⁽¹⁾を行つた。其の結果、アテネはサラミス以外一切の海外領土を失ひ、ピレウスの城壁及び長城を毀ち、十二隻をのこして總ての戦艦をスパルタに交付し、追放者を歸國せしむることを條件として和約が成り、二十七年に互るいはゆるペロポネスス戦役は、アッチカ帝國の完全なる崩壊を以て終つたのである。然しペリクレス以來發展せるアテネの文化は、此の戦役の最中にも變りなく維持され、前章に述べた美花を咲かせ、此の後もアテネが依然としてギリシヤ人世界の文化の中心を爲して居たのである。

(1) 此のスパルタ會議の際、コリント、テーベ等の諸市は、アテネ市の完全なる破壊を主張したが、スパルタはペルシヤ戦役に於けるアテネの功を擧げて、寛大な處罰をとつたと言ふ(Xenoph. Hellenica II. 220)。スパルタの勝利がペルシヤの金力に依ることを考へると笑止であるが、今日アクロポリスにパルテノン其の他が崩れながらも、當時の面影を偲ばせて居るのは、此の時のスパルタの同情のお蔭であらう。

第十一章 四世紀の政治と社會

第一節 時代の概観

都市國家生活
の下降

五世紀を以てギリシヤ都市國家生活の最高潮期と見るならば、四世紀は、明かに其の下り坂の時代である。前世紀を風靡した民主政治は既に多くの缺點を暴露し、此の世紀に入るとプラトン、アリストテレス、クセノフォン、イソクラテス等の哲人、文人により忌憚なく批判された。政治的には小都市國家分立の弊が最も痛切に感ぜられ、其の結果東方のペルシヤ、西方シシリーの僭主デオニシウス(Dionysius)が實力以上に畏怖せられ、彼等の一顰一笑にヘラスの政局が左右せらるゝ有様であつた。都市國家は對外的に無能を示したばかりでなく、内部的にも其の崩壊過程を暴露しつゝあつた。市民軍の漸減と傭兵使用の流行(第四節に詳述)、有力政治家の傭兵隊長としての出稼ぎ等は、明か

ヘレニズムの
準備期

に五世紀を支配して居た「國家觀念」の動搖と、個人主義の擡頭とを物語つて居る。かやうに五世紀に比しては、其の政治的光輝に於て到底比肩すべくもない此の世紀は之を反面から觀れば、アレクサンドル大王東征以後に見るギリシヤ民族の世界進出、ギリシヤ文化の世界征服、いはゆるヘレニズム (Hellenism) の準備期⁽²⁾であつたとも考へられる。ソフィストのゴルギヤス (一九九頁) が、オリンピアでペルシヤに對する國民的討伐を説いたのは、四〇八年 (一説三九二年) と考へられる。彼の弟子にしてアテネの政治評論家イソクラテス (Isocrates) は、ペルシヤ討伐勸説を終生の事業として活動し、アレクサンドル大王東征のために途を開いた。彼には民主政治に對して、君主政を禮讚する思想も既に觀ることが出来る。⁽³⁾ スパルタ凱旋將軍リサンドルスには、東方專制君主の面影が既に見られ、イオニヤの知事キルス (Cyrus)、キプルス島の僭主エウアゴラス (Euagoras)、カリヤ王マウソルス (Mausolus) 等が、ギリシヤ文化を愛好して居たことは周知の事實である。かやうに此の世紀は來る可き新時代の先驅をなしたが、アレクサンドル東征の大業が實現さるゝまでには、なほ多くの政治的曲折がなければならなかつた。以下是等を

をかいつまんで觀察して見よう。

- (1) 都市國家崩壞の原因は、何に求む可きか？ 是は容易に把握し難い問題である。都市の形成を宗教に求めたクーランジュは、其の崩壞をソフィスト、ソクラテス、プラトン等の新哲學の擡頭に歸して居る。(Coulanges : Cité Antique, Livre V. Chap. 1)。此の新哲學が崩壞の因であつたか否かはさておき、住居を定めずギリシヤ各地を遍歴したソフィストの冷淡なる相對主義、個人主義が都市國家生活末期の現象であつたことは認められる。
- (2) 四世紀の小アジアをヘレニズムの先驅者と銘打つた最初の人、Judeich (Kleinasiatische Studien. Marburg 1893) である。
- (3) Isocrates: Nicocles. 14-26 (一八五頁参照)。

第二節 スバルタの覇權

四〇四年アテネ市が降服した後、アテネを敵とした諸市の人々は、『今日からヘラスに自由の日が來たと信ふ』(Xen. Hellen. II. 2. 23) 笛の音に合わせてアテネの城壁を破壊したと言ふ。然るに彼等はアテネとスパルタと役者が替つただけで、芝居の筋は同

スパルタの寡
頭主義強制

第二節 スバルタの覇權

じであることを、やがて悟らねばならなかつた。アテネの民主主義に代つて、今度は寡頭主義が各市に強制せられ、スパルタは之を維持するため、各市にハルモスタイ (Harmostae) と呼ばるゝ役員を送り、軍隊を駐めて監視した。殊にスパルタの勝利に大功あつたため、小アジア都市に於て神とあがめられたリサンドルスは、『十人政治』 (Deka-arkhia) を各市に起し、寡頭主義厲行にとめた。這般の事情はアテネ市に就いて詳しく傳へられて居る (Ath. Pol. 34-35 Xenoph. Hellenica II. 3)。此處でもリサンドルスは『三十人政治』を起し、クリチヤス (一九八頁) の極端寡頭派は、テラメネス等の穩和派を退け、甚しいテロリズムを強行した。此處でもスパルタの駐兵がアクロポリスから監視して居た。が、やがてトランプルス等の民主主義者が、其の逃亡して居たテーベから歸つて、『三十人』の軍を撃破し、クリチヤスも戦死するや、其の殘黨はエレウシスに立て籠つたが、リサンドルスとスパルタ王パウサニヤスとの反目から、民主主義が再び政權を回復することとなり、五百人會議も復興した (四〇二)。

此の後三年、東方に於ては當時のヘレネス世界に大衝動を與へた事件——いはゆるアナ

アテネの民主主義復興

アナバシス

バシス (Anabasis) (大陸行) が起つた。ペルシヤ王アルタクセルクセス・ムネモン (Artabanus) に對し、野心家の弟キルス (Cyrus) はひそかに王位篡奪の計を廻らし、ギリシヤの(殊にペロポネッス)の傭兵一萬を集め、その任地小アジアを出て、首府スサへと向つた。クナクサ (Cunaxa) の會戦 (四〇一) に於てキルス軍はペルシヤ軍を破つたが、キルスが戦死したため、一萬のギリシヤ兵は若きクセノフォン (Xenophon) に率ゐられて、アルメニヤの山地を踏み分け、幾多の艱難の末、黒海岸に出て首尾よく歸國した。是が有名な『一萬人の退却』で、アレクサンドル大王東征の先驅をなした。歸國後クセノフォンは此の事件を記録して發表した。今日ギリシヤ語の初歩の教科に用ゐらるゝ「アナバシス」が是である。

さて、スパルタは、キルスの陰謀を後援した形であつたので、兩國間の雲行きが險惡となり、スパルタは小アジア海岸都市に對する支配權擁護のため、今まで軍資金の金穴として大事にして居たペルシヤと干戈を交ふることとなつた。スパルタ軍ははじめチブロン (Thibron)、デルキリダス (Dercylidas) が之を率ゐてペルシヤ軍と戦ひ、互に勝敗が

スパルタとペルシヤとの乖離

コリント戦役

あつたが、三九六年リサンドルスの愛して居た王アゲシラウス (Agessilaus) が渡海するや、各地に轉戦してペルシヤ軍を苦しめた。然しペルシヤはまたもやその金力によつてギリシヤ本土のテーベを動かし、いはゆるコリント戦役(三九五—三八六)が起つた。テーベはスパルタをハリヤルツス (Haliartus) の戦(三九五)で敗り、リサンドルスも之に戦死した。この勝利は遂にアテネ、コリント其他を奮起させ、スパルタと開戦させたので、サルデスの戦(三九五)にペルシヤ軍を破つて、内地侵入を企て、居たアゲシラウスも、遂に一切を擲つて歸國を急がねばならなくなつた。此の頃アテネ人コノン (Konon) はペルシヤ王のために優秀な艦隊を作り、三九三年クニヅス (Cnidus) の海戦で、スパルタ海軍を撃破したので、スパルタの覇權は最早や維持し難くなつた。コノンはアテネに歸つて、市民に非常に歓迎された。アテネは此の頃ペルシヤの資金で前に破壊した「長城」を再築した。此の頃にはアギルリウス (Agyrrius) — 民會出席者に對する日當制を創めた人 — のやうな極端民主主義者もあらはれ、ローヅス、キウス等をアテネと同盟させた。やがてトラシブルス (Thrasylbulus) が此の方面に向つて積極的に活動を始めたので、ペル

『大王の和約』

シヤは再びアテネに危惧を感じて來た。此の時スパルタの外交家アンチアルキダス (Antialcidas) は此の事情を巧妙に利用し、三九二—一年アテネの抗議で失敗した後、三八六年遂に大王をして、いはゆる『大王の和約』 (Le basilios eirene) を出させ、ギリシヤ諸市にその承認を餘儀なくさせた。此の條約 — と言ふよりむしろ命令こそは、時人をして都市國家の分立抗爭の悲哀をまざく — と感ぜしめ、六十年前のカリヤスの和約 (一五六頁) の時代を黄金時代として追懷せしめたものであつた (Isocr. Panegy. 117-119)。此の條約の内容は、小アジアの都市はクラゾメネ (Clazomenae)、キブルスとともに、大王の有たること。其他のギリシヤの諸市は大小を問はず自主獨立たること。たゞレムヌス、インブルス、スキルスの島はアテネに屬す。之を承認せざるものは大王海陸より攻撃す可し (Xen. Hellen. V. 1. 31) といふのであつた。ペロポネスス戦役時代から小アジアの同胞を賣物にして居たスパルタは、之で其の目的を達したわけで、此の條約は事實に於てはスパルタに有利なものであつた。かくてペルシヤ王の優越は形式的に確立せられ、是以來『大王の和約』は四世紀を通じて、政治問題に於ける金科玉條⁽¹⁾となつて居た。スパ

スパルタの條約
約遵奉

ルタは此の條約履行の監視者の形で、ヘラス本土に勢をふるひ、カルキヂケまで力を伸したが、やがて此の條約の問題でテーベとの決裂を見、遂に自國の衰運を招く結果となつた。

(1) 今後廿五年間、ヘラス本土の戰爭は、此の條約の名で停止せられ、その間屢々ペルシャの干渉を見て居る(三七四、三七一、三六九、三六六、三六二年)。エリス(Elis)がアルカヂヤとの係争に於て、態々ペルシャ大王から要求を滿たしてもらつた例もある。アレクサンドル東征の頃まで(Arrian. Anab. II. 1. 4. 22)ペルシャは此の條約の有効を信じて居た。

東方に於て「萬事を金で動かす」ペルシャ大王がギリシャ本土の政局を左右して居た時、西方ではシラクサにデオニシウス(Dionysius)と言ふ傑物が現はれた。アテネのシラクサ攻圍失敗後、シラクサ海軍はヘルモクラテス(Hermocrates)の下にイオニヤ戰役に參加して居たが、キジクスの敗戦(二二二頁)で退いた。その後シシリー諸市の抗争に乗じて、カルタゴは次第に同島に勢力を伸べて、ギリシャ諸市を破壊し、シラクサも非常な危険に陥つたが、之を救つたのがデオニシウス(一世)(四〇五—三六七)であつた。

シラクサのデ
オニシウス一
世

彼は暴君と傳へられて居るが、とにかく其の絶倫なる精力と、巧妙な外交とにより、其の死に至るまで四十年間⁽¹⁾、シシリーのみならずアドリヤ海まで(ハドリヤ Hadria、アンコナ Ancona 市の建設)勢力を振ひ、ギリシャ本土の政局をも動かした。彼の死後其の子デオニシウス二世が其の跡を繼ぎ、叔父デオン(Dion、哲人プラトー(二六五頁)が之を補佐したが、到底父の偉業を全うする力なく、シシリーはまたも紛亂に陥つた。後コロントからチモレオン(Timoleon)が來て、當時再び東進して來たカルタゴ人を、クリミス(Crimisus)の戦(三四一)で撃退し、秩序を回復したが、其の歸國後(三三六)、シシリー諸市の間には、又復た争がおこり、カルタゴ人の干渉を見た。かくて東方も西方も小國家分立の禍をまざくと示して居る。

(1) 此の四十年の間には、彼の權力に種々轉變があつた。或時はシシリー全土に威を振つたが、シラクサ市に包圍せられたこともある。彼の聲望は、夙にギリシャ本土に傳はり、スバルタ、アテネ等しきりにその同盟を求めた。エフォルス(Erg. 141)に據ると、三八〇年代にペルシヤ王とデオニシウスとの間に、ギリシャ本土分割の密約が結ばれたとあるが、四世紀の政情をよく物語つて居る。

第三節 第二回アッチカ海上同盟とテーベの覇權

アテネがコリント戦役の頃から漸く復興の途を辿つて來たことは既に述べた。三八九年になると、トラシブルスは120の課税(dikote)に基づくアッチカ中心の同盟建設を目論んで居る。三八〇年に發表されたイソクラテスの有名なパネギリクス(カ(勇)参(平))(Panegyricus)は、表面國民の和解とペルシャへの國民的遠征を説いて居るが、實はアッチカ同盟の宣傳が主なる目的であることは學者の研究により明となつた⁽¹⁾(Wilamowitz: Arist. u. Ath. II. S. 384ff.)。二七八—七七年には新同盟の基礎が確立した(D. G. II. 17)。それはデルス同盟成立から正に百年目であつた。尤もその内容は、各市の自主獨立を認め、献金(Phoros)を求むることも、戍兵を置くことも無く、殊に『大王の和約』が顧慮せられて居り、唯アテネが政治的軍事的行動を指導するだけであつた。アテネ以外の同盟市は各一票を有する同盟會議(Synhedrion)を組織し、アテネ民會と合議して決議する定めであつた。同盟者は献金の代りに、彼等の決定した額の税(Syntaxis)を納めた。同じ年にアテネ市

第二回アッチカ海上同盟

アテネの經濟的回復

に於ては租税區域の更新(Symmoria制)により税額が増加せられ、カブリヤス(Chabrias)、チモテウス(Timotheus)等の將軍が同盟を率ゐ、其の勢は侮る可からざるものとなつた。經濟的にもアテネはペロポネスス戦役の災禍から次第に回復し、ギリシヤに於ける商業金融の中心となつた。此の市の奴隸、パシオン(Pasion)の如きは銀行業(Trapeza)によつて非常な富を作り(四世紀初)、市に對する功勞によつて市民權を與へられた。(次節參照)。

- (1) 此の作にはアテネ宣傳の他にヘラス統一とペルシャ討伐との遠大な理想の含まれて居ることとは認めねばならぬ。彼は其の後シラクサのデオニシウスに書簡を送り、(Isocr. Epistula. I)ヘラスの統一を勧めて居り、又フェラー(Pherae)のヤソン(Jason) (I. III. 八頁)にもこの理想實現の望を屬して居た。是等が皆空頼みとなつた後、彼は遂に北方の新興國マケドニヤに期待をかけるに至つた(二五六頁)。とにかく十九世紀まで單なる修辭家と考へられたイソクラテスのパンフレット、書簡等は、此の小冊子にも時々引用して居る様に、四世紀の社會を理會するに、最も重要なものの一である。

然し此の頃アテネと並んで勢力を擴張し始めたものに、中部ギリシヤのテーベと、北方テッサリヤのフェラー(Pherae)市の僭主ヤソン(Jason)とがあつた。三八二年平和の最

テーベの興起

中に、スパルタのフォイビダス(Phoibidas)が、テーベの城カドメヤ(Kadmea)を占領したことは非常な激動を捲き起し、遂にテーベのメロン(Melon)とペロピダス(Pelopidas)とが奮起して、スパルタの駐兵を逐ひ、テーベに民主政を布き(三七九年)、次いでアテネと同盟を結んだ(三七八年)。然しテーベが向上の勢に乗じて、ボエオチヤを昔の聯邦ではなく、テーベ支配下の統一國とした結果、アテネとの同盟が破れ、アテネは却つてスパルタに近づくやうになつた。それでもテーベはヤソンとの同盟に意を強うし、三十七年スパルタ會議に於て、スパルタが『大王の和約』を楯に、テーベのボエオチヤ支配を止めよといつた時、エパミノンダスは斷然之を却ぞけた。そこでスパルタはクレオンブロツス(Cleonobrotus)を送つて、テーベを討たしめたが、有名なレウクトラ(Leuctra)の會戰(三十七年)で一敗地にまみれ、スパルタの勢力は之から永久に地に墜ち、ペロポネスス同盟も分裂しかつたのである。

此のレウクトラの戰は、戰術史上にも重要な一轉期を爲して居る。既にデリウムの戰(二二二頁)に於ても、いはゆる斜線陣式(Loxe phalanx)の陣形が用ひられたと言はれ、

レウクトラの戰

斜線陣

この陣形は元來ボエオチヤに古くからあつたものらしいが、エパミノンダスは是に意識的改良を加へ、攻撃翼と防禦翼とを明瞭に分ち、前者を極めて有力にして(レウクトラの戰では五〇列)、必ず敵軍を破り得るやうにした。此の攻撃翼が奏効した時、後方に退いて居た防禦翼が始めて活動を起し、攻撃部と協力して敵を包圍する仕掛けであつた。レウクトラの戰は此の戦法の用ゐられた最初の例であつたが、これはエパミノンダス以後マケドニヤのフィリップやアレクサンドル大王も用ゐ、近世になつても重要な役目を爲した。

(1) 此の世紀の初め、コリント戰役中、アテネの將軍イフィクラテス(Iphicrates)は、在來の重装兵(Hoplites)の代りに輕歩兵(Peltastes)を創めた。ペロポネスス戰役中(四二九年)にも既に重装せるアテネ軍が輕装のカルキデケ軍に敗れたことがあつた。此の經驗に基づいて、彼は歩兵に前よりも長い槍を與へ、その代り甲冑を軽くし、トラキヤ風の圓楯(Pelte)を持たせた。此の改革は單に戰術的理由の外に、社會的理由が考へられる。即ちイフィクラテスの率ゐたのは、市民軍ではなく無産の傭兵連で、高價な武具を支辨しえなかつたからである(詳しくは第四節二四四頁參照)。なほ此の武装で戰ふ爲には、十分の訓練を要し、その結果、

ます／＼市民兵が減つて、傭兵が用ゐられるに至つた。

スパルタの勢力失墜とテーベの隆興とは、各地に民主政治の擡頭を來し、寡頭政治との激しい抗争が起つた。中部ギリシヤの諸市は(アテネ、エトリアを除く)テーベを中心として、アテネのそれのやうな同盟を形成した。又アルカヂヤの諸市が、一の聯邦を作らうとして、エパミノンダスの來援を請ふや、彼はペロポネススに下り、聯邦を完成して、新設のメガロポリス(Megalopolis)市がその中心となつた。彼はまたラコニヤにも侵入し、又メッセニヤのヘロット等を使喚して獨立せしめ、イトメ(Ithome)附近に新設したメッセネ(Messene)市を中心として、メッセニヤの統一國を成立せしめた。スパルタ人の最重要なる搾取地であつたメッセニヤの獨立は、經濟的にもスパルタの衰運に力をかけたものであつた。

フェレーのヤソンも亦傑物であつた。自家の富力により六千の傭兵を養つて居た彼は、間もなくテッサリヤ全地方を平定し、その頭目(Tagos)となり、『全世界を相手にしうる輕歩兵(Peltastai)を集めた』(Xen. Hell. VI. 1)。彼は夙にペルシヤ討伐のことを宣言

中部ギリシヤ
及びペロポネ
スス經略

フェレーのヤ
ソン

して、勢力擴張に資したと言はれる(Isocr. Philip. 119-120)。當時ペルシヤの不當なる干渉が、人々にいかなる印象を與へて居たかは、是で知られる。彼は又南方進出を策し、レウクトラの戦後スパルタ、テーベの間を仲裁して歸國するや、その名聲は最高點に達して居たが、七人の陰謀青年に暗殺されたので、ペルシヤ討伐も一の宣言に止つた。ヤソンの死後テーベはテッサリヤに干渉し、マケドニヤにも手を伸ばしたが、テーベの隆興の恩人ペロピダスは此の方の戦の中に斃れた(三六四年)。

ギリシヤに於ける覇權を求むるに急であつたテーベが、遂に此の時代の汚點に染まざるを得なかつたのは、エパミノンダスのために嘆かほしいことである。陸上の覇者となつたテーベは、やがて海上權確立へと進んだが、此の頃ペルシヤ大王はアッチカ海上同盟を煙たく思つて居たので、テーベはペルシヤへ使節を送り、その援助を求めんとした。かくてペルシヤ大王をめぐつて、各國使節の猛烈な外交戦が行はれたが、遂にテーベが勝を制し、大王和約の發案者アンチアルキダスは敗れ、失脚して自殺した。此處にも四世紀政局の暗黒面を見るとともに、エパミノンダスが矢張一都市國家的英雄に過ぎな

テーベとペル
シヤ

テーベの覇權
失墜

つたことを見ることが出来る。然しテーベの勢力も、長く續かなかつた。エパミノンダスが三六二年ペロポネススに侵入を企て、マンチネヤで戦ひ、勝利を得ながらも、戦死を遂げたので、此の人傑の力によつて得られたテーベの覇權は、彼の死と共に忽ち崩壊せざるを得なかつた。

然し隣國アテネの勢力も決して永續きはしなかつた。アテネは新同盟創立時代の精神を忘れ、同盟諸市に對して次第に帝國主義的態度に出で、カリヤ王マウソルスの使喚で、キウス、ローヅス、コスが分離を企つるや(三五七年)、いはゆる同盟市戦役(Symmachikos polemios)が起つた。三五九年以來、ペルシヤ王となつた新進氣鋭のアルタクセルクセス・オロス(Ochos)が、アテネを討伐に來るとの報到るや、アテネは周章して、遂に同盟市に兜を脱いだ(三五五年)。かくて二度目の帝國建設の夢も忽ち破れたのである。

此の事件は政治思想上に興味深い三篇の作品を生んで居るので注目し價する。その一はイソクラテスの『平和論』(Peri eirenes)又名同盟者論(Symmachikos)で、三五五(?)年の作。速に同盟者戦役をやめて、海外支配の望を絶つべき事、是がアテネにとつて最も幸福なるを説いて

居る。一は同じくイソクラテスの『アレオパゴス論』(Areopagitikos)、ペリクレス以後の民主政治を難じ、ソロン、クリステネス時代のそれに歸り、アレオパゴスに政權を委ぬべきことを説いたもの。第三はクセノフォンの『收入論』(Poroi)と言ふ小品で、同盟市戦役に敗れたる祖國を見かねた此の哲人が、都市國家の海外支配(Arche)を難じ、自給自足主義を謳歌し、其の實行法を教へたもの。三篇ともに第二回海上同盟の崩壊といふ政治的事件に直面して生れたものであるが、都市國家が事實上の獨立を失つたケーロネヤの戦(二六〇頁)に先だつ事二十年にして、始めて都市國家と帝國主義とは兩立し難いといふ悲觀的結論が、二人のアテネ人の口から出たのであつた。尤も是はソクラテス派の古い主張であつた(Ath. Pol. 41, Platon: laws IV. P. 707c)。とにかく吾々は是等によつて、都市國家末期の政治思想を十分に觀取し得る。事實アテネに於ては、エウブルス(Eubulus 三五四年)が此の『事なかれ主義』に立つて財政策を立て相當の成績を擧げた。

第四節 四世紀の社會、經濟

第八章に扱つたヘラスの社會、經濟生活が、七世紀以來の近代的傾向を次第に徹底せしめつゝあつたとすれば、四世紀は或意味に於て此の傾向が益々徹底し、古來の都市國家

窮民の増加、
社會的危險の
増加

生活の存続との矛盾の現れた時期とも言へよう。即ち商工業は依然盛に營まれ、特に金融業は目覺ましい發展を示したが、一方是と並んで、自由民の生計に苦しむ者が次第に多くなり、自作農で先祖傳來の地を棄て、流浪する者が日に増加し、都市國家を守る市民軍は、漸く影を潜め、ヘラス社會はこの世紀の半に到つては既に大きな危險を孕んで居たのであつた。イソクラテスは四四六年マケドニアのフィリップに送つた書簡(二五六頁)の中に次のやうに言つて居る。

『是等の貧民等に十分の生計を與へ、一處に塊まるを防止せざれば、吾々の氣の附かざる中に頗る増加いたし、バルバロイのみならずヘレネス自身にとり恐る可きものと相成る可く候。是に就いては吾等は何等警戒致す所無く、共同の脅威と危險との増大しつゝあるを識らざる者に候』(S. 121)。

か様な社會狀態の發生には、様々な原因が擧げられよう。その一つはペロポネスス戰役以來の絶え間なき戰爭であつた。ペロッホの算定による(Gr. Gesch. II. S. 336)紀元前四三一年より三四六年迄の八十五年の中、五十五年はヘラス本土に日立つた戰が行

無産者發生の
原因

はれて居た。したがつて此の五十五年間の交戰の爲に、少くとも一度荒掠の憂き目を見なかつた地は、ヘラス本土中絶無と稱してよいであらう。戰禍と共に市民の黨派の争が亦重要な原因であつた。一黨派が他を壓倒して追放した後には、その所有地を沒收するのが常であつたから、是が放浪者製造の有力な原因であつたことは容易に察せられる。此の時代にはスパルタ其の他二三の地を除いては、古來の名門閥族にして傳來の地を保有して居るものは殆ど絶無の有様となつて居た。三二四年アレクサンドル大王がオリンピアの祭に使を派し、追放者を悉く故郷に歸らしむるやう命ずるや、此の使に歡呼する者二萬人を越えたと言ふことである(Diod. XVIII. 8. 5. 119-121頁)。

是等の他に第三の有力な原因として、奴隸使用による大規模の農、工業經營が擧げられねばならない。多年の戰爭は各地に荒蕪地を作つたが、アテネのイソコマクスといふ者が、是等を廉價に購入して、奴隸をして經營せしめ、富を爲した次第は前に述べた。此の世紀の半に入れば、此の傾向は次第に僻遠の地まで侵入し、四六〇年にはフォキスの富人ムナソン(Mnason)が、奴隸一千人を購入して、市民の生業を奪はんとした

(Timaeus Frg. 67)。斯様な奴隸使用の大規模經營に對し、賃銀労働、小手工業、自作農により生計を立てて居た人々が對抗し兼ねて、次第に零落して行つたことも亦察するに難くない。原因は別にせよ、四世紀前半に一部の^{人々}から理想國のやうに看做されたスパルタに於ても、類似の過程が行はれ、レウクトラの戦の頃、その完全な市民は僅か千五百人に減じて居た。又四世紀末にはその國土の五分の二は、大地主の手に收められて居たのである(三〇五頁参照)。

さて是等の無産流浪の民は、いかにして生活の途を見出したか？ 幸にして此の世紀には彼等に最もふさはしい職業が彼等を迎へて居た。それは傭兵(misthophoria)の制度である。ギリシヤに於ける傭兵使用の歴史は決して新しくは無いが、特に是が著しくなるのはペロポネスス戦役以來である。此の時代から政治家と將軍は次第に分離し、同時に古來都市國家の理想なりし兵農一致の制は破れ、市民軍は次第に減少し、傭兵が之に代はるに到つた。是には市民の軍役忌避、無産者の發生の外に、戰術の進歩と言ふ事實も考量に入れなければならない(二三七頁註参照)。四世紀初頭キルスの遠征に際し、一

傭兵使用の流
行

萬餘のギリシヤ傭兵が小アジアに集まつたことは既に述べた(二二九頁)。此の傾向は此の世紀の中に益々進んだので、前節に述べたコリント戦役以下の諸役には、傭兵の使用が最早頗る常例となつて居た。東方のペルシヤ大王及びその下のサトラップ及び西方のデオニシウスにとつて、ヘラスがよき傭兵の狩出し地であつたことは言ふを俟たない。是等の傭兵は職業武人たる傭兵隊長に率ゐられ、己の故國なると他國なるとを問はず、高い賃錢(Misthos)を拂ふものゝ爲に戦つたので、都市國家の存在を根柢から危ふくするものであつた。⁽¹⁾是は本章初頭に述べたやうに都市國家末期の世相を、最も雄辯に物語る現象と言へやう。

(1) 『一萬人の退却』にギリシヤ傭兵を率ゐたクセノフォン(二六九頁)が、既に此の傭兵隊長の型であつた。彼は歸國後コロネヤの役にアゲシラウスの下に、故國アテネと戦つて居る。其の他此の世紀の有名な將軍—例へばアテネのイフィクラテス、カブリヤス(Chabrias)、チモテウス(Timotheus)、カレス(Charēs)や、スパルタのアゲシラウス等皆此の型であつた。彼等はヘラス本土が平穩な際には、ペルシヤ、エジプトまでも出稼ぎに出動した(二七八頁)。無産者の群である傭兵團が、有産者に脅威を與へたことは察するに餘りある。それはイソクラテ

スのフィリップに與へた『流浪者移住策』(二五六頁)や、プラトンの次の言葉に窺はれる。法律篇第五卷 p. 786a に曰く。『國家を清める穏和な方法は次の如し。無一物にて食に窮する輩が、その頭目に從ひ、富める者の財産を攻撃する場合には、國家のか様な當然の禍患は、立法家に依り好意的に能ふ限り多數(外に)送り出さる。か様な送り出しは婉曲に植民と呼ばれる。立法家たる者は何人も直ちに是を行ふやう工夫す可し』と。此處にも吾々はヘレニズム時代前期たる四世紀の一断面を見ることが出来る。

吾々は四世紀社會の暗黒面を眺むるに急であり過ぎた。今や眼を轉じて、此の世紀の經濟生活の最も華やかな方面を観察しよう。私は此處で金融業を述べねばならない。ギリシヤの銀行の起原は神殿にある。蓋し此處は最も神聖な場所として、金品を委託するに頗る安全であつたからである。吾々は既にデルス同盟の資金が、はじめはデルス島のアポロンの神殿に、後アテネのアクロポリスのアテネの神殿に保管されたことを述べた。此の他エフェスのアルテミス(Artemis)の神殿、デルフィのアポロンの神殿には、夫々小アジア及び中部ギリシヤの預金が集まり、是を利息付きで貸附ける事も古く行はれたらしい。此の世紀に入ると、既に三七七年にはデルスの神殿が、四十七タレントの金額

金融業

を利息付で都市及び個人に貸出して居る。然し駭々として進む商工業の發展は金融業が長く神殿の境内に留まることを許さなかつた。それでやがて此の事業は兩替人の事業となり、彼等は市場で卓子(トラペザ)を前に坐して居たので、銀行業も亦トラペザ(Trapēza)と呼ばれた。是には信用と資金とを何より必要とする爲、多數の企業家が結託して營業することも稀でなかつた。五世紀以來金融の中心はアテネであつたが、ペロポネス戰役の終末以後、此處に元奴隷であつたパシオン(Pasion)といふ者が現れ、金融業と製楯業とを營み、ギリシヤ人世界に絶大の信用を贏ち得て、三十タレントの富を蓄へ、その後繼者フォルミオン(Phormion)も亦營業よろしきを得多くの産を爲した。金融業の發達の結果、爲替、小切手の制度も、日常經濟に用ひられる様になつた。

か様に金融業、爲替制度の發展せることは、多年の戰禍にもかゝはらず、商工業的活動は仲々旺盛であつたことを意味する。前に五世紀の經濟の章に述べたやうに、ギリシヤ經濟生活を窺ふ可き史料は、多くは此の世紀のものである。リシヤス、イソクラテス、デモステネス其の他の辯舌家の訴訟關係の演説が多數現存して、其の多くが商法の問題

商工業の隆盛、物價の騰貴

を扱つて居ることも、當時の經濟生活の複雑化の程を物語ると言へやう。

なほ此の世紀には、六、五世紀の傾向を進めて、一般に物價の更に騰貴したことが注目される。是には金の産出量及び流通貨幣の増加等が原因として擧げられる。アギリリウスの創めた(一六〇頁)一オボロスの民會の日當は、後三オボロスに、四世紀後半には六オボロスに増額されて居る。

第五節 マケドニアの興起

アテネ、スパルタ、テーベが次々に覇權を求めて失敗し、ヘラス統一の望が殆ど無くなつた時、俄に興つて瞬く間に此の難事業を完成したのが、北方マケドニアの王フィリップ(Philippus)二世であつた。デモステネスが『奴隸にもならぬバルバロイ』と嘲つたマケドニア人が、果してイリリヤ・トラキア系の異族であるか、或はヘレネスの一派に過ぎぬかに就いては、決定的の證據はないが、其の言語、習俗、宗教、地名等から推して、ヘレネスの一派と目するのが正しいやうである。⁽¹⁾ 即ちギリシヤ民族南下の際、北方に留ま

マケドニア人の
民族的所屬

つた爲め、永く文化と接觸することなく、従つて第一章に述べたやうな原始的要素を多分に残して居た。彼等の間にはまだ都市の發達が無く、其の王は族長であつて、政治、軍事の他、宗教、裁判をも司つた。軍の指揮者たる此の王の側には、大地主貴族が從者(Hetairoi)として控へ—ホメルスに見ゆるアキレウスのミルミドネス(Myrmidones)を想起せよ—又原始社會に見る『武人會議』も存して居た。

(1) 此の問題は「ヘレニズム時代」(十四章)をギリシヤ史上いかに考ふるかにとつて重要であるが、マイエル、ベロッパ共にマケドニア人をヘレネスと見做して居る。

マケドニアの諸王の中では、五世紀末(四一三—三九九)のアルケラウス(Archelaus)が、前代八人の王にも増して仕事をした(Thucyd. II. 100)。彼は軍道を起し、兵備に心を用ひて國力養成に努めたが、其の歿後は王位問題を中心に、國內麻のやうに亂れ、殆ど收拾の途がないやうであつた。然るに三五九年、當時二十三歳のフィリップが軍隊によつて推戴され、王位に即くや、非常なる精力と巧智とによつて、多くの反對者を鎮定して、マケドニアの統一を完成した。

彼の即位以來、三三八年コリント平和會議までの二十年間にマケドニヤが素晴らしい政治的發展を遂げた原因はどこにあつたか？ 先づ第一に、文化享樂になれたる都市國家末期の南方人と、ギリシヤ文化を採用はしたが、⁽¹⁾その基調に於ては、尙ほ北方原始民の活動力を貯藏せるマケドニヤ人との對照を考へねばならぬ。(ローマ帝國末期に於けるローマ人とゲルマニヤ民族とを考へ合せよ)。第二に是と關聯して、國王個人の意志に依つて、政治、軍事一切の事を迅速に決斷遂行する君主政治と、萬事民會の多數決に待ち、動もすれば衆愚政治(Ochlocracy)となりやすい民主政治との差異を考へねばならぬ。四世紀の半の都市國家間の救ふ可からざる分立抗爭、無爲退嬰的な平和主義(二四一頁)も、亦マケドニヤの發展を助長するに力があつたであらう。然し是等種々の事情はあつても、僅々二十年間に於ける、かの驚くべき飛躍は、王フィリップ個人に負ふ所が甚だ大である。彼の巧妙な外交策、徹底的な兵制改革及び新戰術の採用、並に其の實行を可能ならしむる爲めの財政政策の確立、⁽³⁾是等を腦裡に入れておかぬと、彼の成功は十分理會しがたいのである。

(1) Herodot. V. 22. VIII. 137 以下。アルケラウス王は彼の新都ペラ(Pella)の宮廷に、エウリピデス、チモテウス、ゼウクシス等の詩人、藝術家を招いて居る。フィリップ自身も若い頃テーベに人質となり、ギリシヤ文化の優秀を知悉して居た。

(2) 兵制改革は次の如くである。彼は在來の貴族からなる騎兵を、各地方別の分隊(ilai)に分ち、歩兵をイフィクラテス流に輕装させ、サリサ(Sarisa)といふ特に長く槍を有つ密集隊(Phalanx)を作つた。是等は『歩兵のペタイロイ』(Pezetairoi)と呼ばれ、民會に加入する權を與へられた。以上の軍隊を、エバミノンダス流の斜陣法によつて用ひ、騎兵隊を攻撃に、密集隊を防禦に當らしめた。かくて始めて各兵種が結合使用され、非常に嚴重な訓練が行はれ、王自身危險を冒し、部下と苦勞を分つたから、貨錢で左右される傭兵軍は、到底之に對抗することが出来なかつた。殊に王は戰爭に當つて、徹底的な全滅主義をとつて勝利を確實にし、又攻城のためには攻城機を用ゐて人々を驚かせた。

(3) 彼はストリモン(Strymon)河東のパンゲウム(Pangaean)山の金坑を占領し、そこから採掘した金でスタテル金貨(Stater)(11ドラクマに當る)を作つた。此の金貨は間もなくギリシヤ人世界に広く流通し、彼のギリシヤ都市懷柔にも仲々役に立つた。

此の新興國家は、フィリップが内地國のマケドニヤを沿海國にするため、マケドニヤ・ト

海岸への進出

ラキヤの海岸に進出するや、忽ち其の實力を發揮した。三五七年にはアンフィポリス・ピドナ (Pydna) を占領し、ポチデヤを破壊した。三五六年にはパンデーウムの金山がマケドニヤの有となつた(其の根にフィリッピ Philippi 市が建設さる)。是等の諸市はアテネと同盟關係にあつたので、アテネはマケドニヤに對して直ちに開戦を宣したものの(三五七年)、丁度此の時同盟市戦役が起つたのと(二四〇頁)、フィリップの巧みな外交とのために、施す術が無かつた。

此の頃中部ギリシヤに於ては、いはゆる『神聖戦役』(Hieros Polemos, The Holy War) が起つて居た(三五六)。テーベが自己の支配に反抗するフォキス (Phocis) 人をデルフィのアンフィクチオニヤ (Amphiktyonia、宗教同盟) の權力によつて壓迫せんとしたので、フォキス人はデルフィを占領し、フィロメルス (Philomelus)、オノマルクス (Onomarchus) 等の指揮の下に、デルフィ神殿の資金を掠奪し、傭兵を集めてテーベに抗した。なほフォキス人はテッサリヤのフェレー市と同盟したが、此の市はマケドニヤ派であるラリッサ (Larissa) 市と不和であつたので、フィリップは茲に干渉の機を掴んで出兵し、フォキス人と戦

ギリシヤの神聖戦役

マケドニヤのテッサリヤ占領

ふことになつた。最初戦はフィリップに不利であつたが、三五三年クロクス (Croesus) の野でオノマルクスを大破するや、テッサリヤ全地方が彼の指揮に服し、従軍の義務を負ふこととなつた。フィリップは進んでテルモビレーを南下せんとしてアテネ市其の他の軍に遮られたけれども、テッサリヤの占領は今後の發展に頗る有利であつた。

カルキデケ地方占領
デモステネスの反マケドニヤ演説

其の後フィリップは、神聖戦役を放任してトラキヤに向ひ、その王ケルセブレプテス (Cersebleptes) を破つて、ボスフォルス海峡まで領土を擴めた。カルキデケ人はフィリップの勢力をおそれて、條約に反してアテネと同盟を結んだので、王は半島に進みオリントス (Olynthus) と開戦した。アテネは傭兵を以て之を後援したので、王はエウボエヤ島を叛亂させて、アテネの行動を牽制させた。此の頃アテネでは、雄辯家デモステネス (Demosthenes) が政治演説を作つてエウブルスの退嬰主義を難じて居たが、是に至つて彼はいはゆる第二フィリッピカ (II. Philippika) に於て、猛烈にフィリップの野心を攻撃し、速に市民を送つて、オリントスを援くべきを説いた。彼の主張は徹つたけれども、市民軍がオリントスに着いた時には、市はもはやフィリップに降つて破壊された(三四八年)

あとで、他のカルキヂケの諸市も、マケドニアの有に歸した。

(1) 彼は、はじめ裁判所で辯護演説をして居た。彼の最初の政治的演説は三五三年に作られた (Orat. XIV. Symmorienrede)。是はペルシヤ王の威嚇(二四〇頁)の恐る可からざるを説き、寧ろマケドニアの危険なるを暗示し、對策を論じたもので、隠れたるフィリッピカ(フィリッピ演説)と言はれる。「第一フィリッピカ」は、三五年位まで遡ると考へられる。こゝにデモステネスの『演説』と言ふのは、ロゴス(logos)の譯であるが、今日傳はつて居るのは決して民會壇上で發表されたまゝでは無く、その後修正を経てパンフレットの形で出されたものであることは、研究の結果明かになつた。いはゆるデモステネスの雄辯を語るものは、此の事を念頭におかねばならぬ。

此の頃アテネは打續く戰爭に疲れ、主戦派すらも平和を望み、又フィリッピの目的は、決してアテネの破壊を目的としたものでは無く、是と協調せんことを望んで居たので、三四年いはゆる『フィロクラテス(Philocrates、立案者の名)の和約』となつた。此の和約⁽¹⁾にはフィロクラテスの外、デモステネスとエスキネス(Aeschines)が當つたが、現状のまま(St^{atus} quo)互に占領地を保有することとなり、ケルソネスス(Chersonesus)を除

フィロクラテスの和約

フィリッピのギリシヤに於ける勢力

く北方地方は、全くマケドニアの有となつた。アテネ、マケドニア間には念のため防禦同盟が結ばれた。デモステネスは此の屈辱的和約の民會通過を極力阻止しようとしたが無効であつた。

なほフォキス人は此の條約に含まれなかつたが、やがてフィリッピ自ら出馬して之を討つや、彼等は昔日の元氣も無く降参した。王は中部ギリシヤ秩序回復の爲め、フォキスをアンフィクチオニヤ同盟から除名し、彼自身は二票を以て是に加入した。トラキヤ、テッサリヤに對する覇權獲得と、アンフィクチオニヤへの加入は、フィリッピをして中部ギリシヤ、否殆ど全ギリシヤ中の最有力者たらしめたのである。

(1) 此のフィロクラテスの和約に就いては、頗る問題が多い。デモステネス(Orat. XIX『似而非使節に就く』Peri tes parapresbeias)と親マケドニア派のエスキネス(Orat. II)の演説とが重要史料であるが、互に自己辯護を目的として居るから、十分事の真相を傳へては居らぬ。デモステネスの言ふやうに、フィロクラテス、エスキネスがマケドニア側の賄賂で變節したことは疑はしいが、とにかくマケドニア外交の巧妙と、又フィリッピの人物の威壓が、エスキネス等をして讓歩乃至は親マケドニア主義に傾かせたことは考へられる。

デモステネス
とエスキネス

イソクラテス
の大ロゴス

第十一章 四世紀の政治と社會

三五

以上によつてアテネの内部に親マケドニヤ派と反マケドニヤ派とがあつて、互に争つて居たことは明らかであるが、政治外交の上では、エスキネスが前者の、デモステネスが後者の代表であつた。両者は現存する彼等のロゴスでも分るやうに、民會の演壇に於て互に罵倒攻撃し自己を辯護して來たのであるが、フィリップに對し、眞に心から大なる期待をかけ、その成功を望んで居たのは、前に述べた(二三四頁)イソクラテスであつた。彼はフィロクラテスの和約が出来るや、直ちに大ロゴス(Orat. IV Philippos)を作り、王の許に送り又世間に發表した。

此の頗る重要なロゴスの主旨は、三八〇年のパネギリコスと殆ど同じである。ギリシャ都市國家に自己の理想實現を期して失望した彼は、最後にフィリップに向ひ、アテネ、スパルタ、アルゴス、テーベ四市を和解させ、是等諸市の軍を率ゐて、ペルシヤ討伐を成就し、ペルシヤの大王を服従させるか、少くとも、シノペ(Sinope)からキリキヤまで小アジアを征服するか(IV.120)、せめては小アジアのギリシヤ人を獨立にする位は、容易のことと勸説して居る。殊にヘラスにあつて始末におへぬ家なき浮浪人等を小アジアに移されたいと説いて居る(IV.142)のは、前節に述べた四世紀半の社會狀態を物語つて居て興味がある。イソクラテスがいかに誠心誠意フィ

リップに期待して居たかは、王の負傷の報到るや、彼がわざ／＼王に書簡を送つて、輕擧を慎まらるゝやうに説いたのでもわかる(Epist. II)。尤も富裕階級を代表するイソクラテスの主張には、マケドニヤと自國の戰爭を回避する響のあるのは事實であるが。

イソクラテスは當時隨一の修辭學の師であり、その作品はデモステネスのロゴス以上に、ギリシヤ人世界の各地に讀まれたから、フィリップは彼に於てよき精神的支持者を得たわけである。イソクラテス派の中、キウス島のテオポンプス(Theopompus)『フィリップの頌』『フィリップ史』の作者)、アルカデヤのヒエロニムス(Hieronimus)等は熱心なマケドニヤ主義者であつた。其の他アテネのフォキオン(Phocion)や、コリントのデマラツス(Demaratius) (Plutarch. Alexander. 37. 56 参照)なども、ペルシヤ討伐論者であり、マケドニヤ主義者だつた。是等の人々は自己の都市國家がもはや到底自らを救ふの途なきを知つて、マケドニヤの下に民族の發展を期したのであつた。之に反して飽くまで都市國家の傳統に執着して民主政治を以て唯一の理想となし、君主政を蛇蝎視し(II Philippica 25) マケドニヤ排撃を主張したのが、デモステネスの一派であつた。とこ

イソクラテス
のペルシヤ討
伐思想

ろが近年の研究によると、フィリップがアテネの破壊、ギリシヤの隸屬を目指して居たと
言ふこの派の主張は、全く彼等の誤解に基づくもので、フィリップの目論んで居たバルカ
ンの帝國には、アテネも勿論包含されるが、王はアテネの文化を尊重し、之と協力
することを望んで居たらしい⁽¹⁾。従つてグロートの如くデモステネスを以てすぐれたる『汎
ヘレネス主義』の政治家となす考⁽²⁾ (Grote: H. of Greece. Chap. 95) は再批判の必要が
ある。但し傳統的にヘラス中のヘラスと言はれて來たアテネとしては、決してむざむざ
と外夷に兜を脱ぐわけには行かなかつたことは十分考へられることで、其の點から彼の
涙ぐましい熱烈なる愛國的行動は、都市國家の末路に、その過去にふさはしい光彩を添
へたものとして、十分の尊敬と同情とを以て評價せられねばならぬ。唯、其の献身的努
力が遂に奏効しなかつた裏面には、上に述べたやうな事情があつたのである。今や此の
都市國家獨立の末路を飾る最後の場面を観察すべき時が來た。

(1) フィロクラテス和約の締結にも、此の動機が考へられる。ハロンネスス(Halonesus)島の
返還、アテネとの仲裁裁判の提議、ケーロネヤ戦後のアテネに對する寛大等は之を示す。デ

モステネスが、是等を峻拒し、親マケドニヤ派を賣國奴と罵る一面に、ペルシヤの金をこつ
そり受取つて居るのは遺憾である。

アテネに於てはフィロクラテスの和約後も、デモステネスの一派が民會で牛耳を執り、
フィリップは小アジアのアタルネウス(Atarneus)のヘルミヤス(Hermias)と協約を結び、
トラキヤ併合を完成した(三四一)。是によりアテネへの穀物輸送に最重要なるケルソ
ネススが危険に曝された。フィリップはそれでも條約違反の行動に出たのでは無かつた
が、デモステネスは之に對して將軍ディオペイテス(Diopithes)をフィリップ領のトラキヤ
に侵入させ、公然と平和を破つた。フィリップが是に對し抗議を送るや、彼は有名な『第三
フィリップピカ』(三四一)に於て極力開戦を主張し、ビザンチウム、アビズスを同盟に入れ、
又ペルシヤ大王にも援助を求めた。ペルシヤは表面之を拒んだが、ひそかに黄白を贈つ
てデモステネス等を助けたと言はれる。なほコリント、エウボエヤ、メガラもアテネと
結んだ。かくてフィリップがビザンチウム及びペリンthus(Perinthus)の攻撃を始むると共
に、茲にアテネと公然交戦することとなつた。

フィリップの南
下

アテネはペルシヤと共に海軍を以て、是等の市を救つたので、此の方面ではフィリップは思ふ様に目的を達しなかつたが、中部ギリシヤでは、ロクリス(Locris)のアンフィッサ(Amphissa)市に對して再度神聖戦役が起り、アンフィクチオニヤはその討伐權をフィリップに委ねた。フィリップは急遽南下しテルモピレーを通つてフォキスの重要地點なるエラテヤ(Elatea)を占領したので(三三九年)、アテネ人は驚愕色を失つたが、幸ひデモステネスの努力でテーベを味方につけ、いよいよ最後の一戦を試みるこゝとなつた。王は先づアンフィッサを占領懲罰して後、暫らく兩軍對峙して居たが、三三八年秋遂に有名なボエオチヤのケーロネヤ(Cheronea)の會戦となつた。此の戦に王は例の斜戰陣を用ひ攻撃軍は當時十八歳であつた王子アレクサンドル(Alexandrus)に任せ、自分は防禦軍を率ゐ、必死に防戦するアテネ、テーベの同盟軍を全敗せしめた。但し此の戦で王が戦後の追撃を行なつて居ないのは、やはりアテネとの協同を考へた爲めでもあつたらうか。ともかく戦後アテネの取扱は頗る寛大で、テーベに對してはカドメヤ(Cadmea)に駐兵を置いたに反し、反抗の張本人たるアテネは、海上同盟解散と、ケルソネスス割讓とを

ケーロネヤの
會戦

命ぜられたのみで、自治獨立を許された。

一方ペロポネスス其の他に於ける反マケドニヤ主義者も鎮壓され、軍事上重要な地點には、マケドニヤ駐兵が置かれた。スパルタだけは最後まで反抗を試みたが、その領土は荒掠せられ、剩へ所領はラコニヤに限られて、全く昔日の面影も無くなつた。早くも三三八年の末にはコリントに於て諸國會議が開かれた。此處で先づ諸國とマケドニヤとの間の個々の和約に代ふるに、『全般の平和』(Koine eirene)を以てし、スパルタを除く各國は、『ヘレネス同盟』(Koinon ton Hellenon)といはゆる『コリント同盟』に加入することとなり、ギリシヤ都市國家史上に於て、始めて完全なる民族の統一が見られたのである。遺憾ながらそれは他力によつて獲られたものであり、一面に都市國家の獨立喪失を意味して居た。何故ならば、此の條約の劈頭に、各都市の自主獨立は(多分課税、駐兵からの自由も)確立せられては居たものの、此のコリント同盟の指揮は、その覇者(Hegemon)の名で、此の同盟と攻守同盟を結んだフィリップ王の手に存したからである。各都市はその大小に應じて議員を出して『ヘレネス共同會議』を形成し、事務を議した

コリント會議
—ギリシヤの
覇權マケドニ
ヤに歸す

ペルシヤ討伐
の決議

フィリップの暗
殺

が、その執行權はやはりフィリップにあつた。又ギリシヤ全土に互つて平和休戦が宣せられ、各市とも目下の政體を維持すべきことや、海賊掃蕩によつて海上平和を確立すべきことなどが決せられた。此の決議が各國により承認されてから、三三七年最初の共同會議が開かれ、イソクラテス畢生の望であつたペルシヤ討伐、小アジアに於けるヘレネスの救済が宣せられ、いよくペルシヤ討伐の軍を起すこととなり、フィリップはその獨裁將軍に推戴せられた。次の三三六年にはパルメニオン(Parmenion)とアッタルス(Attalus)とが率ゆる一萬の兵士が、小アジアに送られたが、同年夏王は舊都エーゲー(Aegae)で行はれた娘クレオパトラ(Cleopatra)の結婚の饗宴に於て暗殺せられたので、此の大計畫も水泡に歸するかに見えた。

- (1) イソクラテスはケーロネヤ戦後間もなく、九十八歳の高齢を以て、フィリップの勝利を喜びつゝ(Epistula III が偽作でなければ)瞑目した。ペルシヤ討伐宣言は巧みにギリシヤ國民主義に合するやうに、クセルクセスのギリシヤ神殿に對する悪事の復讐と宣せられたが、實はポリビウスの言ふ如く(III. 6)マケドニヤの勢力發展を第一の目的として居たらう。然し

コリント會議の決議が、イソクラテスの主張を多く反映せることは認められる。

- (2) 暗殺者パウサニ阿斯(Pausanias)は近衛兵であつたが、兇行の原因は私的な事であつた。是に政治的意味があつたか否かは十分傳はつて居らぬ。

第十二章 四世紀の文化

五世紀の精神界はエウリピデスの啓蒙的現實主義とソフィスト派の流行を以て幕を閉じた。四世紀に入るとソフィスト克服の爲めに立つたソクラテス門下の哲學が、卓越せる後繼者を得て思想界を風靡する有様であつた。同じくソフィスト派の中から生れた雄辯術や修辭學も、此の世紀に非常な流行を見た。吾々は先づ哲學界を觀察した後、他の部門に移らう。

ソクラテスは自身では一の著作も遺さずその態度は決して學究的では無かつたが、彼の死(三九九)後、その直弟子により三つの有力な學派が創められた。一はアンチステネス(Antisthenes)の派で、その中心がアテネのキノスアルゲス(Cynosarges)のギムナシウム(Gymnasium、體育場)に在つたのでキニク派と呼ばれる。彼は賢人は富や名譽を顧みず、ひたすら徳に精進すべく、高踏的に『文明』を去つて原始に歸る可しと説いた。

ソクラテス門
下の三派

アレクサンドル大王との會見で有名な樽の中の哲人ディオゲネス(Diogenes)により此の派は有名になつた。又アリスチップス(Aristippus)はキレネ派を開き、快樂(Hedone)即ち善徳であり、此は理性(phronesis)により得らると言ふヘドニズム(Hedonism、快樂主義)を説いた。此の兩派とも賢人の遁世主義を説き、「國家」に對して冷淡な態度をとつて居るのは注目す可きである(二二七頁、Xenoph. Memor. II 1. 8以下)。

然し是等の二派を斷然壓倒したのはプラトン(Platon)の創めたアカデミー派であつた。此の名はこの學團がアテネの英雄アカデムス(Academus)のギムナシウム附近にあつたため、原來文藝の神ムーサ(Mousa = Muse)禮拜の教團であつた。開祖プラトン(四二八—三四七)は師ソクラテスから出發しつゝ、次第に師を凌駕し、形而上學の深淵へと研究を進めた。彼の研究成果は、一言にして蓋へば、『觀念論』(Ideenlehre)である。『觀念』(idea)こそ萬有の始原であり、唯一の實在である。是がプラトンの形而上學の歸結であつた。晩年になると、オルフェウス教的思想や、ピタゴラス派の「數の神祕」の思想も、大分重大な影響を彼に與へて居た。その深遠なる思想は、今日にいたるまで哲學

プラトンの學
説と著書

者の好んで論議研究する所で、吾々門外漢の軽々に論じ去る可きものではないが、彼の對話篇(Dialogues)には、かゝる純哲學的なもの、他に、國家學的(Politikos)なものも存することを忘れてはならぬ。『理想國』(Politeia、三七五年以前發表)及び『法律篇』(Nomoi、三四〇年代の晩年の作)が是である。前者では彼は全く理想主義的な國家を考へ、哲學者が最高の爲政者たるべきを説いた。後者では遙に多く現實が顧慮されて居り、四世紀の社會狀態を反映せしめて居るので興味がある。なほ貴族主義のプラトンは故國を去つて三度シラクサに旅し、デオニシウス二世の政治に參與し、哲學者を爲政者の上に立て自己の理想實現を試みたが、是は全く失敗であつた。

プラトンの門に學び、新に逍遙學派を建てたのが、人も知るスタギラ(Stagira)生れの碩學アリストートル(Aristoteles, Aristotle) (三八四—三二二)である。然し師プラトンの在世中は(十七歳より三十七歳まで二十年間)、彼は忠實に師に事へた。師の晩年の學風、殊にその神祕的傾向は彼の同意し兼ねる所であつたらうが、此の『プラトン時代』は、やはり後年の彼の發展の基礎を爲して居る。次いで彼の流浪時代が來た。彼は

アリストートル

トロイ附近のアッソス(Assos)、ついでミチレネに於て講筵を開いた。是はアタルネウス(Atarneus)のヘルミヤス(Hermias)(二五九頁)との關係からであつた。此の頃彼は師プラトンの神祕主義に對して、既に批判的態度に出て居る(對話篇、『哲學について』)。又此の實際爲政者との交遊は、彼に『政治學』に對する興味を起させたらしく、有名な『政治學』の最も古い部分は、此の時代の作と言はれる。同じくヘルミヤスとの關係から、彼はフィリップからペラ(Pella)に招かれ(三四三年)、三年間王子アレクサンドルの教育に當り、之にギリシヤ文化に對する愛と尊敬とを教へた。其の後三三五年アテネに歸つてリケイウム(Lyceum)ギムナシウムの逍遙道(Peripatoi)に講筵を開いた。彼はアテネから逐はれるまで(三二二年)十三年間此處で色々の問題に就いて講義をした。今日傳はるアリストートルの著書は、皆この講義の下書きなのである。彼とプラトンとの差異は、彼は師の純思索的方法と異り、經驗的方法を取り、多數の弟子をして様々の材料を蒐集させ、その學園には、圖書館、研究器械等を備へて、歸納的研究に資したことがある。有名な『政治學』の如きも、かやうな方法で完成されたもので、現存八卷中、二、

研究方法上
プラトンの差

三、七、八巻は、プラトンの『法律篇』發表後、間もなく現はれ、プラトン流に理想國を扱つたものである。其の後アテネに於て、弟子等をして百五十八種の憲政⁽¹⁾ (Politeiai) を蒐集せしめ、此の材料によつて、政治學の四―六巻が作られ、此處では現實國家、その疾病と治療法とが取扱はれて居る。か様にして成立した全體に序論として第一巻が附加せられたのである。⁽²⁾ 是によつて見ても、アリストートルは決してはじめから大成せる人ではなく、一步々々發展せる人格であることを知るのである。

(1) 前に屢引用した『アテネ人の憲政』は、此の蒐集中の一つを基礎として、多分アリストートル自身が一般讀者の爲に執筆せるものである。

(2) Werner Jaeger の劃期的名著 Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung. Berlin Weidmann 1923 の主張に依る。

アリストートルが一人で、自然科学、精神科學の兩方面を自由にこなしたことは、誠に奇異の感を起させる。彼の死後、此の師風を継ぎ得る者は遂に出ないで、各科に分れた専門研究の風が起つた。

哲學派と並んで、之と常に對抗して來たものに修辭學(Rhetoric)がある。

修辭學

ソフィストのゴルギヤスが、特に修辭の事を重んじたのは既に述べた。彼の言葉として『弱き論を變じて強き論となす』といふのが傳はつて居る。彼の弟子で既に幾度も擧げたアテネのイソクラテスが、眞の意味の修辭學の創始者と言はれる。其の他四世紀の最も有名な雄辯家であるリシヤス(Lysias)、デモステネス(Demosthenes)、ヒペレイデス(Hyperides)、デマデス(Demades)が悉くアテネの人であるのは、此の都市が此の世紀に於ても、政治上、文化上、牛耳を執つて居たことを明瞭に物語る。

哲學を空論として斥ぞけ、實生活の必要に應ぜんとした修辭學は、大體『忠言的』(Symbouleutikos)、『集會的』(Panegyrikos) オリンピアの祭の際の如き)なもの、裁判關係のもの等がある。

歴史學

クセノフォン

修辭學の盛んな此の世紀には、歴史學は到底ツキデダスの達した水準を維持することが出来なかつた。ソクラテスの弟子クセノフォン(Xenophon)は、ツキデダスの後を繼いで、四一一年からマンチネヤの戦までの歴史を書いて居るが(ヘラス史 Hellenica)、歴史的偏見が明かに認められ、到底ツキデダスには及ばない。是よりも彼自らの體驗記で

其の他の史家

あるアナバシス(二二九頁)の方が、生彩に富み興味がある。(1) 其他イソクラテス派の中から史家が出て居る。キウス島のテオポンプス(二五七頁)は『フィリップ史』(Philippica)を現はしたが、今は断片のみ傳はり、キメのエフォルス(Ephorus)はヘラクレス一族の歸國に筆を起して、四世紀半までの、ギリシヤの一般史を書いたが、修辭學派の影響が強く、歴史としての價値に乏しい。是等の作及びデオニシウスの友フィリスツス(Phlistus)のシシリイ史は、ともに断片のみ傳はる(F. H. G. Vol. 1)°。之に反し最近エジプトのオクシリックス(Oxyrinchus)から出土したパピルス断簡、いはゆる『オクシリックスのヘレニカ』は、四世紀の史實を補ふに足るが、その作者に就いては議論がある。此の世紀初頭にアルタクセルクセス二世の侍醫だつたクニツスのクテシヤス(Ctesias)は、アッシリヤ史、ペルシヤ史、インド史を著して居るが、是等は殆ど歴史とは呼び難く、ペルシヤ宮廷の祕事をあばき、印度の奇怪を物語る等、興味本位であるが、四世紀の都市國家人の注意を、東方に向けるには役立つたらう。なほアテネ其他に多くの郷土史家が出たが、其の作も断片以外は傳はらない。

(1) アッチカ散文の代表的作家であるクセノフォンの作には、此の他『キルスの教育』といふ政治的小説や、師ソクラテスの思出を書いた『追想記』を始め、多くの小品がある(二四一頁)。

純文學の不振

哲學、修辭學におされて、純文學的作品は、到底前世紀に比すべくもない。悲劇は相變らず、新作競演が行はれた他に、エウリピデスの作が好んで上演された。喜劇は最早や政治問題を扱はないで(アリストファネスの末期の作もさうである)、日常生活の些事等を好んで描くに到り、いはゆる『中期喜劇』となる。なほ此の世紀に入ると、悲劇も喜劇もアテネのみでなく、廣く各地で作られ上演された。詩も到底昔の様に作られなかつたが、アンチマクス(Antimachus)が、『テバイス』(Thebais)といふ叙事詩で神話を歌つて居るのは一寸異彩である。

次に造形美術を觀るに、アテネの覇權失墜で、同市に五世紀のやうな盛な建築的活動が出来なくなつた。此の世紀の有名な建築としては、ペロポネッスのテゲヤ(Tegea)のアテナ神殿(スコパス Scopas の作)、小アジアのプリエネ(Priene)のアテナ神殿(ピテウス Pytheus の作)、二五六年炎上したエフェッススのアルテミスの神殿の新築等が擧げ

四世紀の著名
建築

られる。アテネではかの、エウブールス(二四一頁)の治世の頃になつて、漸くディオニッス劇場の石造をはじめた位であつた。一般には矢張りイオニヤ式ドーリヤ式が用ゐられ、コリント式は多く建物の内部に限られて居た。エピダウルス(Epidaurus)の『圓形建築』(Tholos)の大變美しい内飾が此の例である。之に反して、有名なアテネのリシクラテス(Lysicrates)の記念碑(二三五年)は、純コリント式である。古代世界の七不思議の一に算へられたマウソレウム(Mausoleum)はカリヤのマウソルス(二二六頁)の死後(三五三)、その妻アルテミシヤ(Artemisia)が夫のために建てた廟である。是はピテウスやサチルス(Satyrus)の合作になるイオニヤ式の頗る大きな建物で、その裝飾には、スコパス、ブリアクシス(Bryaxis)等當代一流の彫刻家が之に當つた。

(1) 此の墓がいかに後世まで嘆美せられたかは、立派な廟のことを一般にマウソレウム(Mausoleum)と言ふやうになつたのもわかる。

五世紀の悲劇が、エスキルスの神劇からエウリピデスの人間劇に進んだと同じやうな進路が、彫刻についても言はれる。フィヂヤスの作は神韻漂渺として、莊嚴を旨とした

マウソレウム

彫刻に於ける
人間味

と考へられる。之に對して四世紀アテネの代表的巨匠プラクシテレス(Praxiteles)の傑作『ディオニッスをあやすヘルメス』⁽¹⁾『蜥蜴を殺すアポロ』(Apollon Sauroktonos)『クニドスのアフロデテ』等の像を注視すると、その題材が神話的であるにも拘はらず、そこに頗る「人間的」なる姿を見出すのである。好んである動作中の神々をあらはした是等の作は、最早決して宗教的作品ではなくなつたのである。殊に五世紀の繪畫に創められた感情表現が彫刻にも應用せらるゝやうになつて此の傾向は益々著しくなつた。パルス島のスコパス(二七二頁)は、此の方面を得意として居た。此の傾向は延いて肖像製作となるのである。なほシキオン派のリシップス(Lysippus)は鑄金家として有名であつた。彼はアレクサンダー大王の像を作つて居る。

繪畫に於ては、イオニヤアッチカ派の他に、パンフィルス(Pamphilus)等によりシキオン派が興つた。彼の弟子アペレス(Apelles)が當時最も名があり、リシップスと共にアレクサンドル大王に寵用せられた。彼の傑作としては、コス島のアスクレピウス神殿の『現れ出づるアフロデテ(Aphrodite Anadyomene)』があつたと傳へられる。なほ蠟畫法

繪畫

(Enkauma)の技術も、此の世紀に完成された。

(1) 現存するギリシヤ彫刻中、古典時代の巨匠の原作と、明かに分るのは、まづ此のブラクシテレスのヘルメスだけである。是はパウサニアス(Pausanias)の『ギリシヤ記』のオリンピヤの條に、彼が自ら見たと述べてあるのを、近年ドイツ學者が發掘したのである。(Frazer: Pausanias' Description of Greece. Vol. III. P. 595 以下)

第十三章 アレクサンドル大王

第一節 ペルシヤ征服

マケドニヤのフィリップ王暗殺の報到るや、ギリシヤ各地に、殊にアテネに於てはデモステネスの激勵によつて、直ちに獨立回復の運動が起つた。フィリップの王子アレクサンドルは當年二十歳、父の暗殺後軍隊がその即位は承認したが、父王の覇業は、是で一頓挫を來したと人々は考へた。しかし非凡なる天稟に加へて十三歳の時から碩學アリストトトルに薰陶され、十六歳にして父の不在中國務を總攬し、ケーロネヤの戰では、攻撃隊の主力を率ゐて、偉勳を建てた此の青年の新王は、其の材器に於て父の事業を受けつぐに十分であつたばかりでなく、父王よりも更に⁽¹⁾大きな抱負を抱いて居たのであつた。彼はギリシヤの獨立回復運動に目鼻がつく前に、急遽南下して、テッサリヤの主權

青年新王アレクサンドルの材器と大志

對ギリシヤ霸
權繼承

を得て、不意にボエオチヤに現れたので、獨立運動は未然に防がれた形であつた。かくて彼はコリントに来て、父王フィリップとヘレネスとの間に結ばれた同盟を己の名義に改め、ペルシヤ討伐を宣言してその統帥權を得(三三六)⁽²⁾、南方の鎮まれるを見て、國の北境の不安を除きペルシヤ遠征に後顧の憂なからしむる爲め、ドナウ河まで進んでトリバリ族(Triballi)を討ち、なほ西のイリリヤ族(Ilyrii)をも鎮定した(三三五)。既に此のバルカン遠征に於て、後年のアレクサンドルの用兵の妙は十分窺はれると言はれてゐる。

- (1) フィリップ王には小アジアのヘレネス救済以上に、ペルシヤ覆滅の計畫があつたか疑しい。
- (2) アレクサンドルは父フィリップの場合と異り、マケドニアの一國の發展、小アジアのヘレネスの救済以外に、自己の祖先ヘラクレス、アキレウスに倣はんとする慾望が此の頃から萌して居たことは認めてよからう。

然るに此の征戰中、アレクサンドルの戰死説が傳はつた爲め、南方ギリシヤ方面では、又もや獨立運動の氣勢が起り、此の度は丁度此の年即位したペルシヤ王ダリウス・コドマンヌス(D. Codomannus)も、マケドニアの東征を恐れ、黃白を散じて、ギリシヤを動

ギリシヤ獨立
運動鎮壓

かした。デモステネスはこれを受けてテーベを使喚し、カドメヤを占領せるマケドニア軍を包圍させた。アレクサンドルは南方の事態容易ならざるを知るや、アテネ、其の他ペロポネッス諸市が活動を開始せぬ中に、日に三十キロメートルの急行軍で南下し、突如テーベの城門の前に現はれ一戰して市民軍を撃破した。かくて見せしめのために、長くテーベの支配に苦しめる中部ギリシヤの諸市をして、嘗てはヘラスの覇者であつたテーベ市を完全に破壊させ、其の市民は奴隸に賣らせた。⁽¹⁾

- (1) 此の際王は唯抒情詩人ピンダルスの家だけは保存させたと言ふことである。王はテーベは非常に殘酷に處罰したが、叛亂の張本人なるアテネには頗る寛大で、デモステネス等反抗の巨魁の引渡しを要求も撤回された。之にはフォキオン等のマケドニア派の力もあるが、王がアテネ文化を尊重し、又優れた海軍を有つアテネを飽くまで味方につけんとした爲であつた。

四世紀のペルシヤの内狀はキルスの遠征(二二九頁)でも明かなやうに、かのダリウス一世當時の面影は全く失はれて居た。宮廷内部には婦人寵臣が權を弄し(Pitarch. Artaxerxes)、軍隊は専らギリシヤ傭兵を恃んで居た。既に四世紀中にも、フェニキヤ、エ

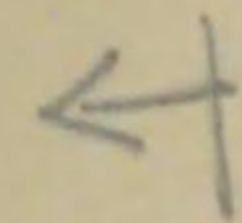
ペルシヤの國
情

ギリシヤ文化
の東漸

ジプト、キプルスの離叛に加へ、サトラップ（知事）の大叛亂があつた。是等の知事は、漸次君主的色彩を帯び（カリヤのマウソルスも元來知事であつた）、時に世襲制をとり、又ギリシヤ文化の愛好者であつた。斯様に四世紀のペルシヤは、ギリシヤ文化の征服を受けて居たので、アレクサンドルの東征は正にこの時代の風潮に乗じたものであつた。さればこそ吾々は夫の大王の迅速なる成功を理解し得るのである。

- (1) アテネのイフィクラテス及び、第二回アッチカ海上同盟成立に働いたチモテウス(Timotheus)は、ペルシヤの傭兵隊長として働いて居る。アゲシラウス王すら、晩年エジプトに渡りタクス(Tachus)とネクタネヒス(Nectanebis)といふ者の下に活躍して居る。フィリップが先發隊を送つた時、その東進を防いで居たのは、ローツス島の人メントル(Mentor)とメムノン(Memnon)の二人であつた。

三三四年春アレクサンドルが、三萬の歩兵と五千の騎兵とを率ゐて、ヘレスポント海峡を渡つたとき、彼の胸中の策は、優勢なるペルシヤ海軍（約四百隻、之に對してマケドニヤは百六十隻）の活躍を麻痺させる爲めに、海軍根據地たるべき地中海東部沿岸の諸市を一々陥落せしむるにあつた。之に對してペルシヤ側では、傭兵長メムノンが這般

ペルシヤ遠征
軍の進發

331

331

グラニクス河
畔の戦

の事情を洞察して、艦隊を以て戦をヘラス本土に移すことの有利なるを主張したが、容れられなかつたので、遂にグラニクス(Granicus)河畔の戦となり、ペルシヤ軍は大敗し、小フリギヤ、リヂヤ等忽ち大王の手に歸した。大王は最初の計畫にしたがひ、海岸を南下し、反抗するミレツス及びハリカルナッスを降し、諸市に民主政を復し、三八六年（二三二頁）以來失つてゐた彼等の獨立を回復した。一方ギリシヤ都市以外の地方からは、献金を取り立てゝ居る。是はアレクサンドル即位の時、マケドニヤの財政頗る逼迫してゐたので、軍費は悉く征服地から取り立つる大王の計畫に據つたものであらう。

次いで大王はフリギヤのゴルヂウム(Gordium)へ進み、小アジア内地を横切つて、キリキヤのタルスス(Tarsus)に出で、三三三年秋には將にシリヤに侵入せんとして居た。さてペルシヤ側では、グラニクス戦の後、メムノンが其の主張せる通り艦隊を率ゐ、戦場をヘラスに移さうとし、既にキウス、ミチレネ等を占領してエーゲ海諸島に勢力を振つて居たが、此の年彼が死んだのは、ペルシヤ軍に取つて非常な損失であつた。なぜなればペルシヤ大王は先の敗戦にも懲りず、今やアレクサンドルを陸上の一戦に打負かさ

うと思ひ、自ら大軍を率ゐてエウフラテス河に沿ひ進んで来たからである。アレクサンドルはイッスス (Issus) の南方に於てペルシヤ軍が背後に在ることを聞き、忽ち軍を班した。かくてアマヌス (Amannus) 山脈と海との間の狭い海岸に於て、いはゆるイッススの會戦が起つた(三三三)。此の戦にペルシヤ軍も仲々勇敢に戦つたが、途中でダリウスが軍を見棄てて逃亡したので、大王は又もや大勝利を得たのであつた。此の戦の後ペルシヤはエウフラテス河以西を提供する事を條件として和を請うたが、大王が自ら「アジアの王」と稱して之を峻拒したのは、大王の雄志がペルシヤ戦役に對する復讐以上の大なるものであつたことを物語つて居る。

イッススの戦でペルシヤとの勝敗の數は既に決したかに見えたが、慎重なる大王はあくまで最初の計畫の通り、地中海東部海岸に沿つて南下した。此の地方の都市は大概無條件に服従したが、唯、チルス (Tyrrus) とガザ (Gaza) の兩市だけは頑強に抵抗を試みた。王は前者を様々の術を盡して七箇月の攻圍の後に、後者を二箇月の攻圍によつて陥落させ、進んでエジプトに入つた。エジプト人はペルシヤの長年の抑壓的支配からの解放者

として大王を喜び迎へた。王は彼等の宗教に對し、寛容の態度を示した一方、ギリシヤ文化の移入につとめ、後年ヘレニズム文化の中心となつたアレクサンドリヤ市をナイルの一河口に建設した。なほ大王はエジプト滞在中、軍事的意味から離れて、非常の困難と戦ひつゝ、リビヤ (Lybia) 砂漠中のシヴァ (Siva) のオアシスに往き、託宣で名高いアモン (Amon) の神に詣でたことは、王の性格と政策とを窺ふ上に、注目し價する。

此のオアシス訪問は大王の行動中最も疑問に富むものであるが、此のアモンの託宣は早くからヘレネス間に信仰せられて居たので、大王は之に依つて自己の今後の行動に宗教的な意味を附與せんとしたかも知れぬ。なほアモンの僧が大王を『アモンの子』と呼び、大王が自分を『ゼウスの子』とヘレネス間に布告したことは、王の世界統治思想、専制主義化の過程を窺ふに大切である。

三三二年春アレクサンドルはエジプトを發しいよゝくアジア内地に向つた。ペルシヤ側は非常な軍備を整へて之を邀へ(二百臺の鎌附戰車、十五頭の象)、チグリス河の彼方、アルベラ (Arbela)、ガウガメラ (Gaugamela) 間の平野に於ける最後の決戦となつた。此

の戦にペルシヤ軍は兵勢の大なるにも拘はらず、巧妙な大王の戦術に陥り、ダリウスが
 またも戦の半で逃亡し、やがて全軍總崩れとなつた。グラニクス、イッスス、ガウガメ
 ラの三戦とも皆堂々たる會戦で、大王は原則として父王以來の斜陣法を用ゐ、地形、兵
 員等に應じて、極めて巧みに臨機の策に出で、三度とも輝やかしい勝利を得たのであつ
 た。大王の多くの遠大なる意圖は、その夭折によつて多く中絶せられたので、政治家と
 しての大王を評することは頗る困難であるが、彼が世界史上最も傑出せる武將の一人た
 ることは否めない。

ペルシヤ王はまだ生きて居たけれど以前から辛うじて結束せられて來た老大國ペルシ
 ヤは、此の決定的敗戦によつて、事實上崩壊し、大王はペルシヤ遠征の目的は十分達し
 たわけであつた。そこで大王は一旦ダリウス追跡を止め、バビロニアの古都バビロンに
 入り、次いでペルシヤの首都スサに入りペルシヤ大王の蓄積した莫大な財寶を手に入れ
 た後、ペルシヤ發祥の地に入り、ペルセポリス (Persepolis) の宮殿と、パスアルガデー
 (Pasargadae) にある歴代のペルシヤの王の墓地とを占領し、宮殿には火を放つて之を焚

ペルシヤ發祥
 地への進入

ギリシヤ義勇
 兵放還

き、コリント會議に於ける公約を完全に履行した。⁽¹⁾ 三三〇年春大王は北進してエクバタ
 ナ (Ecbatana) に達し、此處で之まで困苦を共にしたギリシヤからの義勇兵に厚く報うて
 歸國させた。之はギリシヤ民族のペルシヤに對する國民的復讐が完了したことを意味す
 るとともに、アレクサンドルが個人の新しい王として更に大なる事業に移りつゝあるこ
 とを示すのであつた。

- (1) 此のペルセポリス宮殿を焚いた動機が何であつたかは、現存する所傳からは不明である。
 プルタークによると、アテネの遊女タイス (Thais) がその發起者であるが、實は大王がペル
 シヤ覆滅を象徴する爲にやらせたか、又はコリント同盟乃至ギリシヤ人等に、此の遠征が『ク
 セルクセスの悪事』に對する復讐であることを誇示する爲であつたか？ とにかく大王は此
 の遠征中、グラニクスの戦後には、アテネ市神アテナに三百のペルシヤ武器を送り、ガウガ
 メラの戦後には、プラテーエー、クロトン二市に好意を寄せて、自己の行動がペルシヤに對
 する復讐なることを示すにつとめて居る。

第二節 インド遠征

イラン人の反
抗鎮壓

やがてアレクサンドルは、逃亡したダリウスを追跡して、バルチヤ (Parthia) まで往つたが、王は離叛したる近臣の爲に既に殺されて居た。離叛者の一人なるバクトリヤの知事ベッスス (Bessus) は、アルタクセルクセスの名でアレクサンドルに對抗し、又イラン地方の慍悍な土人等が服従を拒んだので、王は是から三年の間、此の地方で非常な苦戦をせねばならなかつた。イラン人等はいはゆるゲェリリヤ (Guerrilla、小戦の義) の形で、土地不案内のマケドニヤ軍を悩ましたが、此の際アレクサンドルの將才は一層の光彩を放つた。大王は此の新戦法に應ずる爲め、我軍の編成を改め、又兵の補充の爲めには、新たにペルシヤ人をも採用し、遂にイラン人等を畏服させ、進んでバクトリヤ (Bactria)、ソグヂヤナ (Sogdiana) に入り、ヤクサルテス (Jaxartes) 河 (今日のシルダリヤ Syr-darja) を渡つて、彼岸のサカ人 (Sakai 塞人) に示威を行つた。なほ此の地方に、王は多くの『アレクサンドリヤ』市を建設して居る。

大王の重臣處
刑

此の年代に、大王の重臣や親友等が次々に死刑に處せられたのは大王にとり取りかへしのかぬ不幸であつた。三三〇年には常に王の參謀として度々の戦に大功をあらはしたパルメニオン (二六二頁) の子フィロタス (Philotas) が、軍會の決議で死刑となり、次いで父パルメニオンも大王の命で、エクバタナに於て殺された。三二八年マラカンダ (Maracanda=Samarkand) の饗宴では、グラニクスの戦で大王の危急を救ひ、命の親であつたクリツス (Citius) を、大王手づから刺し殺し、次年にはアリストートルの甥で、アレクサンドルの東方式『跪拜禮』(proskynesis) 採用に反對したカリステネス (Callisthenes) は、或陰謀に加擔した廉で殺された。斯様な大王と近側との乖離は、大王と將士とが互に友達仲間のやうであつたマケドニヤ風から、東方專制主義への轉化を示すものと考へられる。

大王の專制君
主化

アレクサンドルの專制君主化、最後には神化、(二九一頁) は一見東方專制主義の感化のやうに見ゆるけれども、その根本に於ては、民主政治、寡頭政治、僭主政治に不満を感じた四世紀ヘレネスの心的傾向の中に生れたものである。神と人との間に嚴正な區別を置かぬ考は、ギリシヤ起原である。たゞ晩年に採用された様々の儀式等は東方のものであるが。(Meyer: Alexander der Grosse und die Absolute Monarchie. Kl. Schriften. S. 304 ff.)

ペルシヤ帝國領は完全にアレクサンドルの支配に歸した。白髪のイソクラテスが父王

インド遠征の
動機

フィリップに向つて勧めた、殆ど夢のやうな事が (Epistula III) 今や見事に成就したのである。此の後アレクサンドルは更に東に進み、印度まで侵入したが、是は、ペルシャ征伐とは全く別個の事柄で、それには別の動機が存したと考へられる。今までヘレネスには全く不可思議の國であつた (Herod. III. 98 ff. Ctesias Indika) 印度の魅力や、神話のデオニススやヘラクレスの功業を夢みる若き大王の名譽慾、更にペルシャ故領のみならず、あらゆる可住地 (oikoumene) を包含する世界帝國建設の理想 (後述アフリカ遠征の計を考へ合せよ!) 等が、此の未知國への冒険を説明し得るのである。

印度に於ては當時諸小國が相争つて居たので、王は巧に之を利用し、その一なるタクシラ (Taxila) のタクシレス (Taxiles) を味方につけ、反對者の頭ポルス (Porus) をインヅス河の支流なるヒダस्पес (Hydaspes) 河畔に破り、東進してヒファシス (Hypphasis) 河畔に達した。大王はその地で土人からガンガ (恒河、Ganges) 河の存在を聞き、そこまで進まうとしたが、不慣れな熱帯地の酷暑と、七十日も続いた豪雨、物資の缺乏と、悪路進軍の困難とに疲れ切つた將卒が、最早東進を承知しなかつた。それで大王も已むを得ず

大王の西歸

海路の探検

バビロンへ凱
旋

踵を廻らし、インヅス河を下り西歸の途に就くことになつた (三二六年秋)。大王は前に建造した艦隊⁽¹⁾ に入り組んでインヅス河を下り、軍の一部は沿岸の部族と戦ひつゝ、陸路河畔を下り、十箇月を費やして河口のパタラ (Patala) に着いて港を築いた。是から西歸に際し、大王は將軍ネアルクス (Nearchus) をして艦隊を率ゐて、インヅス河口を解纜し、今のベルチスタンの海岸に沿うて西航し、ペルシャ灣を経て兩河地方に到る、前人未踏の海路⁽²⁾ を航行探究させた。大王自身は此の艦隊と並んで陸路を西進し、乾燥したゲドロシヤ (Gedrosia=ベルチスタン) を、非常な困難と戦ひつゝ進んだ後、三二四年春無事スサに歸着した。此の地方では王の遠征が餘りに久しきに互つたので、大王は最早歸るまいと思ひ、王の任命しておいた知事等の間に、越權な事をするものが多く、綱紀紊亂してゐたが、大王はスサに着くや、早速斷乎たる態度を以て此等を懲罰して秩序を回復し、それからバビロニヤの舊都バビロンに凱旋し、こゝを新帝國の首都と定めた。

(1) アレクサンドルは西歸を考へる前から艦隊を作らせて、インヅス河航下を考へて居た。是は鰐の棲息によつて此の河をナイル河の上流かと考へ、この地理を究明する目的があつた。

此の時に限らず、アレクサンドルの遠征に、頗る科學的探檢の性質のあつたことは注意せねばならぬ。彼の軍隊には科學者の一隊が隨行して居た。エジプトでは王はナイル河上流を探檢して、氾濫の原因が熱地の豪雨にあることを究明して居り、後にはヘラクリデス (Heraklides) を遣つて、カスピ海が湖水であるか海灣であるかを調査させて居る。遠征地は皆測量された結果、後年の地理學の爲めに頗る便益を與へた。大王の斯様な活動は、アリストートルの弟子としての一面を示すと共に、後章に説くヘレニズム時代の科學の隆盛を思ふとき、大王をその先驅者と言ふことが出来やう。

(2) 前に七一頁に述べたやうに、スキラックスが既にペルシヤ灣方面の海を航して居るが、それは灣口に近きホルムズ (Hormuz) 邊まで往つたに過ぎぬ。ネヤルクスは此の航海について、アリヤヌスの『インド誌』に引かれた『沿岸航行記』(Periplus) を著した。なほ同じアリヤヌスの『アナバシス』は、從軍せる將軍プトレメウス (Ptolemaeus) や、アリストポールス (Aristobulus) の記録のやうな最もよき史料によつて大王の遠征を組織立てたもので信憑するに足る。其の他プルタークの英雄傳中の『アレクサンドル』もよき史料に基づいたものであり、クルチウス (Curtius) の記事は、反マケドニヤ系の史料に據つて居るので興味がある。

第三節 ヘラスの事情 アレクサンドルの死

大王東征後の
ヘラス

アレクサンドル大王が東征に出發した後のヘラスの事情はどうであつたか？ 大王は出發後のヘラスの安寧の爲に、マケドニヤの將アンチパトルス (Antipatrus) を置いて行つた。コリント同盟に獨り加入を肯じなかつたスパルタの王アギス (Agis) は、やがて叛亂を企て、ペルシヤとの結託を計つて居たが、ガウガメラの戦の後(三三二年暮)アンチパトルスはメガロポリスの戦で大に之を破つたので、スパルタも遂に同盟に加入を強制され、ヘラスの安寧が確立した。アテネに於ては、此の時代に入つても、エスキネスとデモステネスとの抗争が續き、偶、後者の國家に對する功勞に對し「冠」を與ふ可きか否かについて、兩人は大論戰を交へたが (Demosth. XVIII de corona, Aeschines III adv. Ctesiphonem)、エスキネスが遂に敗れ (三三〇年)、それで彼の政治的活動は終りを告げた。此の頃アテネ市の財政にはリクルグスといふ者が當つて居たが、その巧な政策によつて國庫の収入は大に増し、市も亦大に美觀を加へた。文藝方面では、此の

ハルパルスに
絡むアテネの
疑獄

デモステネス
の逃亡

頃アリストートルがリケイウムで講義をして居たのである。此の頃かねてアレクサンドルがペルシヤから没收した財寶の保管を托されてエクバタナ (Ecbatana) にゐたハルパルス (Harpalus) は、大王のインド遠征中其の保管金を私消してゐたが、大王が歸途に就いたと聞いて、五千タレントの大金と六千のギリシヤ傭兵とを私して、出奔し、アテネに來て盛に金を散して市民を籠絡した。それでマケドニヤから彼の引渡しを要求したが、市民は之を拒み、其の金は國庫に預かつた。其の内にハルパルスは身の危険を感じてクレタへ走り、アテネは其の金をマケドニヤに提供せねばならなくなつた。然るに其の一半が不足して居たので、茲に疑獄が起り、多數の名士が罪に坐することとなつた。其の際デモステネスも收賄嫌疑者の一人となり、遂に彼は其の熱愛する祖國から逃去するに至つた(三二四)。

一方東方の事情を観るに、アレクサンドルの遠征中、既に様々の事件にあらはれた大王の專制化の傾向は、スサへ歸着の後、次第に露骨になつた。世界統治の目的の前には、マケドニヤ國家の傳統も、コリント會議の誓約も、次第に力を失はざるを得なかつた。

結婚による融
合政策

殊に大王がその遠大なる目的のために人種融合を計り、軍隊にペルシヤ人を用ひた外、三二四年にはスサに於て八十人のマケドニヤ貴人とペルシヤ婦人との結婚を行はせ、大王自身もダリウスの長女スタチラ (Stathira) 及びオコスの娘パリスチス (Parysatis) と結婚した。然しその後、王がオピス (Opis) に於て一萬人のマケドニヤ老兵に歸國させようとした時、かねてペルシヤ人優遇に内心不平を抱いたマケドニヤ人の暴動が爆發し、その鎮撫には大王も一方ならず手を焼いたのであつた。

此の事件の後、大王は一片の敕令を出し、コリント同盟諸國に對し自身を神として崇むる事を要求して居る(三二四)。是は四世紀に於けるヘラスの傾向の延長と見るべきもので(二八五頁、リサンドルスの神化、Isocrates epistula III 参照)、各市で色々議論のあつた後、翌年ヘラスの使者がバビロンの王の許に之を受けに行つたのも不思議では無かつたが、此の事も彼の王の親友ヘフェスチオン (Hephaestion) のためにエクバタナで擧げられた莊麗極まる葬儀と共に、大王の專制君主化を示すのである。然し其の後大王がその神的權威を實際問題に適用して、コリント同盟諸國に對し、その追放者を悉く歸國

大王の神格承
認要求

さするやう命じたのは、都市國家に於ける政局の暗黒面を取除かうと試みたものであつたらうが、其事たるや到底實行不可能であり、且つその強制は明にコリント會議の決議を破つたもので、同盟は全くその存在を無視された形となつた。此の無理な命令はアテネ其の他の反對により、遂に完全に實行されなかつた(二四三頁参照)。

大王の計畫
殞落

大王はバビロン歸着(三二三年春)後、バビロンとアレクサンドリヤとを海路で連絡するため、艦隊を建造させネアルクスの下にアラビヤ週航をさせようと計畫した。此の計畫其の他から観ると、彼の眼が西方世界の征服にも向けられて居たやうである。其の艦隊建造も出來、出發の期日も決定された時、不世出の英雄大王は急にマラリヤに罹り、遂に再び起つ能はざるに至つたのである。

(1) 大王が西方世界をも征服しようとして居たか否かについては、今日まだ定説がない。

大王の性格

か様にアレクサンドルは三十二歳の壯齡を以て早世したので、彼の事業を評價するには、多くの困難が伴ひ、彼の性格批判についても種々の意見が存するのであるが、以上彼の活動を通觀して來たゞけでも、彼が歴史上に於ける個人—偉人の意義を示す最もよ

大王の事業の
世界史的意義

い實例であるのを知るに足らう。(1) (勿論其の業績を正當に評價する爲には前に述べた四世紀ギリシヤ人世界の社會事情を充分考量する必要があるが)。實にドロイゼン(Droysen)が喝破したやうに、アレクサンドルの名は一の世界時期の終末と、新時代の開始とを意味するのである。彼の空前の大遠征と、各地に於ける都市建設の事業、民族融合の計畫等は、今までペルシヤ帝國の存在によつて阻まれて居たギリシヤ民族の東方發展のために、大道を開き、その結果政治上に非常に變動を來し、ヘレニズム時代(Hellenistic Age)と稱する新時代を生むに至つた。吾人は章を改めて此の新時代を觀察しよう。

(1) アレクサンドルの名がいかに後世に大きな印象を與へたかは、いはゆる『アレクサンドル・ロマンス』(Alexander Romance)のヨーロッパから中央アジアに亘る廣汎な流布によつて知られる。漢籍の中にその變形を求むることも無駄でなからぬ(Ausfeld: Der Griechische Alexanderroman. Teubner 1907. 参照)

第十四章 ヘレニズム時代

第一節 ヘレニズム諸國の情勢と國際關係

以前にはギリシヤ史と言へば、ケーロネヤの戦(三三八)乃至アレクサンドル大王時代を以て、その終末と見たものであつた(Grote: History of Greece. Curtius: Griechische Geschichte 等)。然し其後ドロイゼン(J. G. Droysen)が、其の名著『ヘレニズム時代史』(Geschichte des Hellenismus 1836-43)を著して、アレクサンドル大王以後の時代が、ギリシヤ史の重要な一時期であると喝破して以來、『ギリシヤ史』と稱するものは、當然此の期間を含むやうになつた。此の新時代に入つて、アレクサンドルの後繼者として政治的に活躍するマケドニヤ人が、果して純粹のヘレネスであるか否かは疑問であり、又ギリシヤ本土は政治的には僅かに昔日の餘喘を保つに過ぎなかつたのであるが、

ギリシヤ史の延長

ヘレニズムに於けるギリシヤ要素

此の時代の文化を擔つて行つたのは、マケドニヤ勃興以前長く民族の獨立を保つたギリシヤ人(ヘレネス)の子孫であり、その文化には東方的要素が多分に加味されて居るとは言へ、ギリシヤ要素が主要な力を示して居るのである。たゞ此の文化はかの古典文化の餘光に過ぎず、又政治的には、此の時期の後半は、ローマの干涉が次第に力強くなり、寧ろローマ史に入るべき時代であるから、此の小冊子では、なるたけ簡単に、時代發展の要綱を窺うに留めよう。

第二節 ヘレニズム時代の政治と經濟

アレクサンドル大王が、後繼者を残さずして死んだため、その大帝國は忽ち分裂の運命に陥つた。マケドニヤの重臣等は、フィリップ二世の病身の子フィリップ・アリデーウス(P. Arrhidaeus)と、アレクサンドルの遺腹の子アレクサンドルとを擁して、互に勢力を争ひ、いはゆるヂャドコイ(Diadochoi 後繼者の意)戰役が二十年間續いた。ペルデッカス(Perdiccas)、アンチパテル(Antipater)、クラテルス(Craterus)、プトレメーウス

ヂャドコイ戰役

イプススの戦
と其の後の形
勢

(Ptolemaeus) アンチゴヌス (Antigonus)、リシマクス (Lysimachus)、エウメネス (Eumenes) 唯一のギリシヤ人) 等は、非常なる精力を以て互に抗争し、最初ベルヂッカスを相手に他が同盟を結び、その死 (三二二) 後は、アンチゴヌスとその子デメトリウス (Demetrius Poliorketes) とに對して、プロトレメーウス、リシマクス、セレウクス (Seleucus)、カッサンドルス (Cassandrus、アンチパテルの子) が同盟し、長い間交戦が続いた。結局三〇一年有名なイプスス (Ipsus) の戦で、アンチゴヌスが敗れ戦死するや、エジプトはプロトレメーウスに、シリヤ並びに以東はセレウクスに、トラキヤ及び小アジアの一部はリシマクスに、マケドニヤはカッサンドルスの有に歸した。是より先、三一七年には、フィリップ・アリデーウスが、翌年にはアレクサンドル大王の母オリンピヤス (Olympias) が殺され、王家に忠實であつたエウメネスも同年死し、幼きアレクサンドルも母ロクサネと共に、カッサンドルスに殺された爲め、三〇五年頃から各將皆恣のままに王號を冒して居たが、此のイプススの戦によつて、彼等四人の勢力範圍が略定まり、ヂヤドキの四王國が成立を見たのである。其の後リシマクス王家には相續の争が起り、之に關聯してリ

ガラチャ人の
移動

シマクスとセレウクスとがリヂヤのクルペヂウム (Curpedium) に戦ふや (二八一)、リシマクスは是に戦死し其の王國は崩壊した。又カッサンドルスの後にはプロトレメーウス、ケラウヌス (Ptolemaeus Ceraunus) といふものが王位に即いたが、ガラチャ人と戦つて戦死した。此のガラチャ人 (Galatai) は、いはゆるケルト人でリシマクス王國の崩壊後、二八〇年以來バルカンを南下し、ブレンヌス (Brennus) 等に率ゐられて、中部ギリシヤを荒掠したが、エトリア人等の力で北方に撃退された。その後彼等は小アジアに渡り、その名によりガラチャ (Galatia) と呼ばれた地方に定住し、多く傭兵としてヘレニズム國家に用ゐられた。さて前に述べたアンチゴヌスの孫のアンチゴヌス・ゴナタス (A. Gonatas) が此のケルト人の侵入を撃攘つて (二七七) 名聲を揚げ、遂にマケドニヤの王位に登り、こゝにアンチゴヌス、プロトレメーウス、セレウクスの三王家が、新世界に覇を争ふこととなつた。

さて是等の頗る錯雜せる政治的轉變の間に介在して、ギリシヤ本土 (ヘラス) はいかになつたか。アレクサンドルの訃報が傳はるや、アテネとエトリアは忽ちマケドニヤに叛

ギリシヤ本土
の形勢

旗を翻へし、アンチパテル(二八九頁)と開戦し、彼をラミヤ(Lamia)に包圍したが(ラミヤ戦役)、やがて克蘭ノン(Crannon)に敗られ(三二二D)、海上ではアモルグス(Amor-gus)の戦でアテネの海上権は全滅の憂目を見た。かくてアテネは降服し、市にはマケドニヤの戍兵が置かれ、寡頭政治が布かれた。デモステネスは追放せられて自殺した。其の後東西にヂヤドキの王國が出現して、干涉の手をヘラスに延ばさんとするや(ヂヤドキ戦争時代以來『ヘラスの自由』の名で、彼等は屢々ヘラスを味方にするに努めて居る)、在來の小都市國家は、單獨では到底自衛の力がないので、諸市が多くの同盟を作つて新時代の必要に應ずることとなつた。その多くの同盟の中でエトリヤ同盟(Aetolian league)とアケーヤ同盟(Achaean league)が、長く重要な活動をなすことになつた。此の兩同盟はアッチカ同盟などと異つて、一市が其の牛耳を執ることのないのがその特徴で、民主主義的な同盟規約を有する強固な聯邦であつた。前者は三一四年既に存在せること明かでガリヤ人撃退に功を擧げ、後者は二八〇年に成立を見、やがて英傑アラツス(Aratus)が出てからはエトリヤ同盟に劣らぬ勢力を得たが、此處にもギリシヤ傳來の

エトリヤ、ア
ケーヤ兩同盟

東方新世界の
開放

分立主義が禍し、兩同盟は互に反目抗争を続け、其の上北方のマケドニヤ、南方のプトレメーウスが之を利用した結果、ヘラスは絶えざる交戦の巷であつた。其の上東方新世界が開かれ、エジプトのアレクサンドリヤ、オロンテス河畔のアンチオキヤ(Antiochia)、チグリシ河畔のセレウキア(Seleucia)等の諸市が續々建設せらるゝや、ギリシヤ人は新大陸發見後歐洲人がアメリカへ移住したやうに狹隘なヘラスを棄て、活動の新天地を求めて續々東方オリエントへ移住したのである。⁽¹⁾その結果、世界經濟の中心はヘラスを去つて東方に移り、プトレメーウス家領、セレウクス家領の異常なる發展に引き替へ、ヘラスは日々衰頹の途を辿らねばならなかつた。四世紀まで見られた人口増加は三世紀に停止し、二世紀に入つては次第に人口の減少を來し、遂に史家ポリビウスをして彼の有名な嘆息をはかせたのであつた(Polyb. 37. 9を見よ)。嘗ては「世界の中心」(Xenophon. Poroi I)であつたアテネ市も僅に史蹟と哲學研究とによつて人々を集めたに過ぎなかつた。たゞコリント市だけは、ローマと東方との交通の要路に當つて居たため、『ヘラスの星』と呼ばれ、異例の繁昌を示して居た。

東方の繁榮と
ヘラスの衰頹

(1) ヘレネスは以前八―六世紀に互つて、地中海諸地方に植民發展した。此度の世界進出は此の第一回發展の範圍を廣めたに過ぎぬか？ 否其處には根本的な相異がある。さきに述べたやうに、四世紀以來都市國家の觀念は次第に崩壊し、前回の植民市は「母市」から出發した市民團により形成され、各新市間に排他的傾向が強かつたに反し、今度は各市民は皆『世界の市民』として、其のドーリヤ人たり、イオニヤ人たると、アテネ市民たり、コリント市民たるとを問はず、新天地に進んで共に都市生活を營んだのであつた。是は前代と此の時期の差異を見るに頗る重要である。其の他、前代の都市が獨立の都市國家であつたのに、今回のものがヘレニズム諸王國內の、軍事外交の權を失つた單なる都市に過ぎなかつた事は言ふ迄もない。勿論都市の内政に就いては多く自治が與へられ、セレウクス家領に於ては都市獨立の傾向も強かつたが。(後述)

マケドニヤの啓蒙的専制主義

ヘラスの衰頹に反して東方世界は時代の潮流に乗り、支配者の自覺ある經濟、文化政策に依つて空前の繁榮へと進んだ。唯一の民族國家であつたマケドニヤ王國が、古來のマケドニヤの傳統を失はず、殊に哲人肌のアンチゴヌス・ゴナクスの『啓蒙専制主義』(enlightened despotism、王の「名譽ある奉仕 endoxos douleia」の言を考へよ)によつ

エジプトの官僚政治

て、民主的傾向を示したに反し、エジプト及びシリア王國(セレウクスの王國)では、アレクサンドル大王晩年の態度を繼承した専制主義が行はれ、エジプトでは是が最も有効な中央集權的官僚政治となつてあらはれ、その行政はモムゼン(Theodor Mommsen)の喝破したやうに、(Röm. Gesch. V, 559) フレデリック大王の政治に酷似して居た。殊に經濟發展の爲には、最大の努力が拂はれ、その爲に最高權力を有する一人の財政官(diketaes)が任ぜられ、その目標とする所は、正しく十七、八世紀のマーカンチリズム(Mercantilism)的政策であり、世界商業に於ける覇權確立であつた。首府アレクサンドリヤには東方のインド、アラビヤ、アフリカ方面からの物産が集められ、加工して地中海方面に賣り出された。又エジプトの穀物はナイル氾濫の天恵に加ふるに王の耕地改良工事を以てし、一層收穫を増し、五、四世紀にヘレネスを養つた南ロシアの穀物を壓倒し、是亦エジプトに莫大な「金」を齎らした。其の他プトレメーウス王家は種々の專賣を行ひ、又奢侈品に重税を課し、而して課税にも現物より貨幣を重んじた結果、プトレメーウス家は世界に於ける最富者となつたのである。その人口もヘラスが次第に減少した

プトレメーウス家の巨富

のに反し、此の時代の間、三百萬から七百萬に増加したと考へられる。

なほプトレメーウス家に就いては、歴代の王がその肉親の姉妹を后として居るのは見逃し難い事實である。是は時に政略結婚の理由があつたとしても、エジプトの王朝に盛に行はれた兄妹結婚の影響を考ふべきであらう。吾々は此處にもヘレニズム社會の一斷面を見るのである。

次に小アジア・シリヤと東方のアレクサンドルの故領を含むセレウクス家はエジプトと異り、その領域が餘りに老大で、纏まりがなく、やがて分裂の運命を見たが、歴代の王はやはり商業の發展に頗る留意し、東方の商業を獨占せんとした。殊に印度の物資を西方に媒介して巨利を博し、更にアラビヤとの商權を確保する爲めに、南部シリヤ方面の領有に關して、絶えずプトレメーウス家と抗争して居た。殊にセレウクス家は都市建設に力を注ぎ、その點で東方のギリシヤ文化に非常の貢獻を爲して居る。プトレメーウス家は僅に一つのプトレマイス (Ptolemais) の市を作つたに過ぎないのに、セレウクス家はチグリス河畔のセレウキヤ、(Seleucia)、シリヤのアンチオキヤ (Antiochia)、及びその港なるセレウキヤの他に、無数の都市を建設してギリシヤ人を招き住ませ、世界史上

セレウクス家の政策

新都市建設

土人の反抗

に於ける最大の都市建設者の名を擅にして居る。さてか様に此の二國は東方民族の上に君臨して老衰せるヘラスに代つてギリシヤ民族とその文化との爲に氣を吐いて居たが、彼等は土着のアジヤ人の上の薄い上層階級を爲して居たので、時の進むにつれ、ギリシヤ主義に對する土着民の反抗が生じたのは必然であつた。エジプトでは、三世紀末にプトレメーウス四世 (Ptol. Philopator) と同五世 エピファネス (Epiphanes) との代に、土人の反抗が起り、シリヤ王國では、二五〇年頃にデオドツス (Diodotus) と言ふギリシヤ人の下に、バクトリヤが獨立した後、間もなく (一四八年) アルサケス (Arsaces) の下に、バルチャの土人がシリヤの支配を脱して獨立した。老大なシリヤ王國がか様に次第に分裂せる外、ヘラスを中心とする北、東、南の三國が互に勢を争つて、西方のローマが共同の大敵であることを顧みなかつた結果、南方の敵カルタゴを破つたローマは、次第に東方に手を伸し、遂に上の三國を次々に滅ぼして、世界統治を完成するに至つた。ローマ支配の下にあつても、實にギリシヤ文化の餘光は、ビザンツ帝國 (ギリシヤ帝國) の時まで輝いて居るのであるが、此の冊子では東方主義に心酔せるアントニウス (Ant-

tonius)が、ローマ主義を代表するオクタヴィヤヌス(Octavianus)にアクチウム(Actium)の役で破られるまでを、極く簡単に描いておく。

ギリシヤ人世界の中で、最も早くローマに征服せられたのは、イタリア半島南部のいはゆるマグナ・グレキヤ(Magna Graecia)であつた。タレントゥムの後援に來た野心家のエピルス王ピルス(Pyrrhus)の、ローマとの浮沈に富んだ交戦はローマ史に譲るが、要するにアレクサンドル大王に倣はんとした此の野心家には、大王に見らるゝ強い忍耐力がなく、遂に何物をも成就せずしてアルゴスの市街戦に斃れた(二七二年)。此の頃エジプトに於てはプロトメーウス・フィラデルフス(P. Philadelphus)が位にあつたが(二八五—二四六)、シリヤのアンチオクス一世と戦つて勝ち(第一シリヤ戦役二七四—二七二)、更にヘラスに手を出し、スパルタ、アテネと同盟してマケドニアに對し宣戦した(クレモニデス Chrenonides 戦役二六六—二六二)。是は全く同盟軍の敗北に終り、其の後シリヤのアンチオクス二世テオス(Theos)に對する第二回シリヤ戦役も芳ばしくなかつたが、フィラデルフスの歿する頃まで、エジプトの勢力は未だ侮り難いものであつた。

ローマのマグ
ナ・グレキヤ
征服

エジプトの情
勢

シリヤ王國の
分解

是に引き替へシリヤ王國に於ては、此の世紀の間に徐々に分解作用が行はれ、リシマクスの家の廷臣の割據したペルガムム(Pergannum)は、シリヤに屬するといふのは唯、名義だけであり、東方ではバクトリヤ、パルチヤの二王國が相次いで獨立して居る。かくて此の王國はその名の示すやうにシリヤ、パレスチナ地方に局限されてしまつたのである。しかもエジプトとの反目は尙ほ解けず、プロトメーウス三世エウエルゲテス(P. Energetes 一四六—一一二)は、大遠征を試みて、シリヤ王國全土を席捲したと傳へられる。此の紛亂を利用してペルガムムのアッタルス(Attalus)は自立し、ヘレニズム文化史に忘る可からざるペルガムム王國を建てた。其の他各地方の都市に、周圍の廣大な地域が政治的に附屬するに至つたことも、シリヤ王國內部の結合を弛めるに與つて力があつた。

ヘラスの情勢

此の頃のヘラスの事情を見ると、スパルタは甚だしい貧富の懸隔に惱んで居たが(一四四頁)王アギス三世が出で負債の帳消し、土地再分等の大變革を企てて失敗した後、若きクレオメネスがその志を繼ぎ、遂に改革を成就し再びスパルタの國威を揚げた。ス

バルタの擡頭は、アラトスに率ゐらるゝアケーヤ同盟との衝突を來し、後者は危地に陥つて、本來の目的に反し、マケドニアのアンチゴヌス・ドーソン(A. Doston)と同盟して、スパルタに當つた。スパルタは此の同盟軍とセラシヤ(Sellasia)と戦つて敗れ(一一一一)、クレオメネスは敗走し、その改革事業は水泡に歸した。是が獨立せるスパルタの政治的活動の最後であつたと言つてよからう。

ローマの勢力
發展

此の頃西方に於ては、ローマの勢力が次第に外に向つて伸びつゝあつた。第一回ポエニ(Poeni)戦役(一一六四—一一四二)の結果、シシリーの大部分はローマ領となり、四世紀の末アガトクレス(Agathocles)の出現によつて、ギリシヤ民族のために最後の氣を吐いたシラクサ市は、此の戦にローマに盡したので、其の領地を保つことができたけれども、後ハンニバルに與して、ローマ軍に攻落され、遂にその屬州都市とならねばならなかつた(一一二二)。ローマの東侵の手がアドリヤ海を越えてバルカン半島に伸び始めたのは、イリリヤのスコドラ(Scodra)の海賊退治に出動し、大に之を破つて、その女王テウタ(Tenta)をして和を結ばしめた時(一一二八)であつた。此の後ハンニバル(Hannibal)の第

シラクサの滅
亡

ローマのバル
カンへの進出

二回ポエニ戦役(一一一九—一一〇一)の時になつて、ヘレネスの間に、ローマの恐るべきを説き、相互和解の要を説くものが始めて出た。それはナウパクツスのアゲラウス(Agelauus)であつた。なほハンニバルはそのローマとの戦争に、東方諸國を身方に引入れようとして全力を盡したが、エジプトはフィラデルフス以來ローマと親密な關係に立つて居たので之に應ぜず、僅かにマケドニアのフィリップ五世が、カンネー(Cannae)の戦の後(一一一五)之と同盟したのみであつた(いはゆる第一回マケドニア戦役)。此の頃エジプトにはプトレメーウス五世エピファネス(Epiphanes)が位にあつたが、父フィロパトル(Philopator)の時以來のエジプト土人の叛亂に苦しんで居た。是を見たマケドニアのフィリップ五世及びシリヤのアンチオクス三世(大王)は、同盟してエジプトの海外領土を侵さんとしたので、エジプトは新興ローマに援を求めたので、第二回マケドニア戦役(一一〇〇—一九七)となり、一九七年のキノステファレー(Cynoscephalae)の戦で、ローマの將軍フラミニウス(T. Q. Flaminius)が勝利を得て、マケドニアは降服した。ローマの元老院には古來の農業國の傳統を墨守する者多く、決して東方への發展に努力したわけではなかつた

第一回マケド
ニア戦役

第二回マケド
ニア戦役

が、今やローマがギリシヤの保護権を獲得することとなつた。ギリシヤ諸市はフラミニウスにより自由を保證せられたけれども、ローマの支配は一步步々東方に伸びて來た。其の後アンチオクス三世が帝國復興を志し、バルカンまで手を伸し、又ローマの仇敵ハシバルを帷幄に容れたので、ローマは耐へ難くなり、いはゆるシリヤ戰役（一九二—一八九）が起つた。此の度はローマはマケドニヤを味方に得て、テルモピレー（一九二—一九〇）の兩戰で、大いにシリヤ軍を破り、アンチオクスをしてタウルス山脈以西の地（即ち小アジアの大半）を割かせ、其の西半は之をローマの忠實な同盟なるペルガムとローヅスとに與へた。是によつてシリヤは一朝にして威勢地に墜ちたが、之に反してヘレニズム時代以來、穩和な民主政治が行はれ、交通の要衝を占めて商業頗る殷盛であつたローヅスは、新に對岸カリヤの地を得、ペルガムも亦俄に大領土を加へ、俱に繁榮の頂點に立つた。此の後ローマはマケドニヤ王ベルセウスが熱心に軍備を整へて、自己に當らんとするのを見、是に宣戰したので第三回マケドニヤ戰役（一七一—一六八）が起つた。此の戰役は最初マケドニヤ側に有利で

シリヤ王國の
衰微

第三回マケド
ニヤ戰役

ローマ政策の
轉換

あつたが、ローマの老將エミリウス・パウルス (Aemilius Paulus) が來て、ローマ軍の士氣を振肅し、有名なピドナ (Pydna) の戰（一六八）で、大にマケドニヤ軍を破つた。此のピドナの戰は、誠に世界史に一時期を劃する事件で、今まで海外發展に就いては頗る因循だつたローマ元老院が是から、その商業階級の利害を重んじて、斷然帝國主義的に發展するやうになるのである。その政策の轉換は、以下に述ぶる諸事件に發露してゐる。

第三回マケドニヤ戰役後ローマはマケドニヤ王國を滅ぼして、マケドニヤの本領内に四州を置いて互に分離せしめ、アケーヤの諸市からは、志士一千を人質にしてイタリヤに移した。殊にローマ、マケドニヤ間を和解せしめんとしたローヅスは、カリヤを奪はれ、尙ほローマはデルス島に自由港を開いてローヅスの商權に致命的打撃を與へた。エジプトはローマと親善であつたが、今は外交方面は悉くローマに左右さるゝやうになつた。ギリシヤでは、ローマ黨と國民黨との争が激しかつたが、ローマは一四八年にマケドニヤをローマ屬州となし、遂にギリシヤも之に附屬させ、都市同盟も最早や政治的活動を許されぬやうになつた。ペルガムムの王アッタルス三世は一三三年死に臨み遺言を

マケドニヤ、
ギリシヤのロ
ーマ服屬

第二節 ヘレニズム時代の政治と經濟

以て、自己の王國をローマに献じたので、ローマは此處に「屬州アジャ」を置いた（二一九）。その後ローマの租税受負人 (Publicani) が、屬州民に對し、盛に搾取を行つたので、アジャ人の間には、ローマに對する非常な反感が醸成された。丁度此の頃ポンツス (Pontus) の王ミトラダテス六世エウパトル (Mithradates VI. Eupator) が、その勢力を西にひろめ、ローマに對して宣戰し、「屬州アジャ」に侵入したが、かねてローマ人に抑壓された州内のギリシヤ人等は、ポンツス王を歓迎し、その命により、小アジャ在住のイタリヤ人を斃殺した（八八）。ヘラス本土に於ても僭主アリスチオン (Aristion) の下に、アテネ市が最後の反抗を試みたが、名將スラ (Sulla) が來るに及び、忽ち鎮定せられ（八六）、ミトラダテスも最初スラに破られ、後ポンペイウスに撃破されて自殺し、ローマに對する東方の最後の反抗も失敗に終つた。

シリヤ王國は其の後益々衰微し有名無實となつて居たが、ポンペイウス (Pompeius) は東征の際に遂に之を廢絶して「屬州シリヤ」を置いた（六四）。ヘレニズム王國の唯一殘存者であるエジプトも最早獨立の實を失つて居た。九六年にはクレナイカがローマ領とな

シリヤ王國の
衰亡

ミトラダテス
戦役

クレオパトラ

り、後屬州とされ、五八年にはキプルスもローマ屬州に入つた。放縱なプトレメーウス十三世アウレテス (P. Auletes) が、アレクサンドリヤ市民に逐はれ、ローマの力により復位して以來、ローマの守備兵がアレクサンドリヤに駐在し、エジプトの併合も時の問題となつて居た。此の時あらはれてプトレメーウス家の最後に、否東方世界の最後に一脈の生彩を添へたのが、ヘレニズムの産んだ美貌の女王クレオパトラであつた。ケーザルが彼女の容色の擒となつた後、三頭政治の一人であつたアントニウスも亦その轍を踏んだのは人の知る所であるが、若しアントニウスがローマ側のオクタヴィヤヌスに勝利を得て居たならば、或は彼はローマから分離して、東方的な君主政治を再現したかも知れない。しかし事實は三一年のアクチウム (Actium) の海戰によつて、西方の優勝と決したのであつた。ヘレニズムの政治史も此處を以て打切るのが適當と考へる。

(1) 此の時代にローツスは地中海世界商業の最も重要な中心を爲し、此處に輻輳する船舶からの港税も夥しい額に上つた。二二七年此處に地震が起り災害を與へた時、ヘレニズム諸君主、諸市の與へた金品、財貨による非常なる同情は (Polybius V. 88-89) 此の一市の盛衰

がヘレニズム經濟生活に重大關係ありしことを物語る。

(2) 古典時代ギリシャ社會に於て、婦人の地位の低かつたことは一一五頁に述べた。ヘレニズム時代に入つて、プロトレメーウス二世フィラデルフス(愛妹)の實妹で、後年后となつたアルシノエ(Arsinoe)の權力の如きは、矢張り東洋的要素の勝利を示すもので、新時代の風潮を示す。クレオパトラの史上に於ける活躍も亦同様である。アウグスツス時代アレクサンドリヤに婦人クラブが存したことは、婦人の地位向上を雄辯に物語る。

第三節 ヘレニズムの文化

アレクサンドル大王の東方新天地の開発によつて、世界經濟の發生を見たやうに、ギリシャ文化が東西の世界を征服したが、此の時代の最も著しい特徴である。ローマ帝國、ビザンツ帝國、サラセン帝國を通じて、現代までもギリシャ文化が支配して居る⁽¹⁾は實に此の時に置かれたのである。然し此のギリシャ文化の廣汎な分布は、當然東西の「バルバロイ」の文化との接觸を來し、古典時代の純ギリシャ的(ヘレニック)文化は、その影響を蒙むることとなつた。故に吾人は此の時代の文化を、「ヘレニスチック」(Hellenistic)

ヘレニズムの
特徴

と呼んで「ヘレニック」(Hellenic)と區別するのである。

(1) 坂口昂博士著、「世界に於けるギリシャ文明の潮流」(岩波出版) 參照。ローマ帝政期が文化史的にヘレニズムの一期に過ぎなことは Otto: Kulturgeschichte des Altertums S. 104 ff. が力説して居る。

東西の『ギリシャ化』の過程は、處により遲速の差があつた。一般に都市に於てギリシャ化が著しく、それは競技場、劇場の存在によつて跡づけられる。之に反して一般に地方農民の間には古來の文化が永く存續して居た。且つ概觀すればエジプト、シリヤ方面に於ては、かのプロトレメーウス、セレウクス家の繁榮せる時代に於て、最も盛に『ギリシャ化』が行はれ、やがてそれが下火となり、遂には、前に三〇三頁にも述べたオリエント(東方)の反抗が、文化方面にも漸く盛となり、最後にオリエントはオリエントによつて奪還される結果となるのである。エジプトに於ては前述のやうに、ギリシャ都市はアレクサンドリヤとプロトレマイスの二市に過ぎなかつたけれども、此のアレクサンドリヤこそは、ヘレニズム文化の中心であり、其の他エジプトの各郡(nomos)の中心なる

エジプト及び
シリヤとギリ
シャ文化

62

メトロポリス(Metropolis)にギリシヤ的生活の盛であつたことは遺物で明らかであり、本書でも前に二三擧げたやうにギリシヤ古典のパピルスが、頗る豊富にエジプトの砂中から出ることは、此の事實を最も雄辯に物語る。此處では支配層たるギリシヤ人の外、土着のエジプト人の僧侶等も、ギリシヤ語を用ゐたこと明らかで、又ヘレニズム時代にシリヤ、エジプト等にひろく分散したユダヤ人の間でもギリシヤ語が重用されたことは、三世紀中に舊約聖書のギリシヤ譯、いはゆるセプツアギンタ(Septuaginta)の出來たので明らかである。

其他小アジア、シリヤ地方にも多數のギリシヤ都市が建設され、バビロンにも、ギリシヤ文化びいきのアンチオクス四世エピファネスによつて、ギリシヤ都市が建設され、その劇場も發掘された。二世紀末まで此處で體育競技の行はれたことは、出土した勝利者の表が示して居る。イラン東部は、セレウクス家が殊に熱心に都市建設を行つた處で、バクトリヤに於てヘレニズムは盛に培養せられ、此處から中アジアを通じて、支那日本まで影響を及ぼして居る。⁽¹⁾ 印度方面に對するギリシヤ文化の影響、殊に造形美術の方面

ギリシヤ文化
の東方傳播

の影響は世間周知の事實である。ギリシヤ人世界に佛教傳道者を送つたと傳へらるゝ阿育王の佛教美術(紀元前三世紀の半)や、ローマ帝政期に當るガンダーラ(Gandhara)美術が即ちそれである。⁽²⁾

(1) 法隆寺中門の柱にギリシヤ建築のドーリア式圓柱の *Entasis* (胴張) の見ゆることは、伊東忠太博士の指摘された所であるが、是が中アジアを経て傳つたものであることは、中アジア出土の繪畫の建築圖に斯様な柱が見えるので明らかである。

(2) 印度の劇及び叙事詩が、ギリシヤ文化に影響されて居ると言ふ説は、近頃の研究で否定されて居ると言ふ。しかしギリシヤの影響が彫刻に止まらなかつたことは、印度説話を蒐録した本邦最古の説話集である「今昔物語」の天竺篇に、イソップ(Aesopus)の影響の見ゆることでも明らかである。(卷五、第廿四話、龜不信鶴教落地破甲話)。是より更に面白いのは、同書卷十の盜人入國王倉盜財殺父語第廿二は、震旦の話となつて居るが、實はヘロドゥス(Herodotus)に見ゆる有名なエジプトの「ランプシニッス(Rhampsinitus = Ramses)王と盜賊」の物語の燒直しに過ぎない。(龍谷史壇三ノ一禿氏祐祥氏、「竺法護譯ノ生經とヘロドゥス」参照)。なほ「百合若大臣物語」がホメルスの「オデッセイア」を換骨脱胎した作と言ふ坪内逍遙博士の主張は世間周知であらう。

吾々はヘレニズムと言へば兎角東方を聯想するが、西方、殊にローマのヘレニズムも是に劣らず重要な事實である。勿論此の方面には新にギリシヤ都市が出来たわけでは無かつたが、ローマのイタリヤ半島征服、東方進出の結果、若き人々の間にギリシヤ崇拜が澎湃として起り、保守的なカトー(Cato)は、此の傾向を阻止するに大童であつた。然し此處でもギリシヤ文化は決して完全な勝利を示さなかつた。プラウツス(Plautus)とテレンチウス(Terentius)とが、ギリシヤの新喜劇をラテン語に翻譯したのでも分るやうに、ラテン語はあくまで保有され、その文學はいかに多くギリシヤ式意匠を受けついで居るとは言へ、やはり「ラテン文學」なのである。

吾々はギリシヤ文化の東西に向つての傳播を考察したから、次に此の新時代の文化の内容を窺ひたい。先づギリシヤ文化の媒介者とも謂ふべきギリシヤ語の變遷の上に、此の時代の著しい現象が認められる。それはいはゆる『コイネ』(Koine. 共通語)の發生である。三〇〇頁に述べたやうな、ギリシヤ人の混住、キニック派(二六四頁)や、ストア派(三二三頁)の哲學によつて助長された、『吾は世界の市民』といふコスモポリタニズ

ムが、古いドーリヤ方言とイオニヤ方言との對立を無くしたのは言ふまでもない。而して發生した新語がイオニヤ化されたアッチカ方言であつたことは、古典時代に於けるアテネの偉大な文化的貢獻の當然の結果であつた。言語ばかりでは無い。此の時代にはギリシヤ都市間の法律の差異が次第に失はれ、遂にアッチカ法が廣く用ゐられるやうになり、後には帝政期ローマの法律にも影響を及ぼして居る。

なほヘレニズムの文化の一特徴は、前にも述べたやうに東方的要素の混在である。是はヘレネスが東方に進出して後、土着民と共住し、時には土着の婦人と結婚もした爲めばかりでなく、古き東洋文化が、彼等に感化を與へたことは、容易に考へられるのである。ヘレニズム文化の中に於ける東方的要素の存在は、以下説く所によつて明かであらう。(三〇二頁参照)

アレクサンドル大王が科學に對する愛好心の強かつたことは、前章に述べた。大王によつて始まつた此のヘレニズム時代の文化には、科學の隆盛といふことが著しい特徴を爲して居る。大王の科學尊重が、アリストートルの感化であるやうに、此の時代の科學發

達は此の碩學の事業と密接な關係がある(二八八頁参照)。なほ是には大王のデアドコイ(後繼者)たるプトレメーウス家の科學研究の保護も重要な關係を持つて居るのである。

プトレメーウス一世は、逍遙學派に屬するファレルム(Phalerum)のデメトリウスの勸説により、アレクサンドリヤ市の王城附近にムセイオン(Mouseion Museum)を作り當代の碩學を集めた。此の名はギリシヤの文藝學問の神『ムーサの宮殿』の義で、プラトンの學派がそうであつたやうに(二六五頁)、ムーサ(Mousa)の教團に屬したことを示すが、ムセイオンの内容は、今日の學士院乃至は研究所に相當した學問研究の爲めの便宜施設が一切完備し、數十萬卷を藏する圖書館がそれに附屬して居た。アレクサンドリヤ市には、その他天文臺、解剖所、動物園も設けられ、同市は正しくヘレニズム文化の中心であつた。セレウクス家も矢張り此の方面に努力したが、アンチオキヤは到底アレクサンドリヤに比肩し得なかつた。二世紀になりアレクサンドリヤから學者が追放さるゝや、アッタルス家の下に科學の盛であつたベルガムムが、次いでローヅス島がアレクサンドリヤの地位を奪つた。

アレクサンドリヤの學問研究機關

數學

天文學

地理學

動植物學

醫學

數學では三世紀アレクサンドリヤのエウクリデス(Euclides)が『原理』(Stroicheia)といふ著述を爲して、在來の幾何學を集成した。同じく三世紀に出たシラクサのアルキメデス(Archimedes)―彼も亦アレクサンドリヤに學んだ―は恐らく古代數學の最高峰を代表して居る。彼の研究は微積分法まで及んだと言はれるが、又機械學の方面にも多くの貢獻を爲して居る。數學と並んで、天文學も盛に研究されたが、是にはバビロニヤ地方の古カルデヤ人の天文の知識が與つて力があつた。サムス島のアリストアルクス(Aristarchus)は太陽中心説を建て、地球が自轉しつゝ太陽の周圍を廻ると説いたが、時人は之を信じなかつた。その他地理學及び動植物學には、アジヤの開放が非常な啓蒙の作用をなしたことは言ふ迄もない。地理學では三世紀にキレネのエラトステネス(Eratosthenes)が、地球の周圍の長さを殆ど正確に測定することに成功した。彼は『地理誌』(Geographika)を著した。植物學ではアリストートルの弟子テオフラッスス(Theophrastus)が師の『動物誌』に倣つて『植物誌』を著して居る。醫學はアレクサンドリヤに於てはじめてその科學的研究が起り、死體解剖が行はれ、是により空前の進歩を見た。

第三節 ヘレニズムの文化

此處では罪人の活體解剖すら行はれたと言ふ。醫學者としてはコス生れでアレクサンドリヤに學派を開いたヘロフィルス(Herophilus、三世紀の人)や、少し後れてクラシストラツス(Crasistratus)が有名である。前者は動脈と靜脈の區別を發見した。以上の學者が皆三世紀に屬するのでも分る通り、自然科學の研究は、三世紀が最も隆盛で、二世紀は最早下り坂であつた。

精神科學

精神科學は自然科學に壓倒された形であつたが、矢張りアレクサンドリヤを中心とする古典學、文學が注目す可きものである。同市の圖書館に、多數のパピルス卷物が蒐集せられた結果、初めて本文批判が可能となり、ホメルス其の他の古典の研究が起つた。著名な學者としてはゼノドツス(Zenodotus)、アリストタルクス(Aristarchus)等があつた。二世紀になるとペルガムムの古典學派も盛であつた。

史傳類

ヘレニズム時代の歴史的著作や其の他の散文は、キケロ以來のアッチカ崇拜、古典時代偏重の影響で、殆ど皆散佚し、後世の引用によりその片鱗を窺ひ得るに過ぎない。(Miller: F. H. G. Vol. II 所收)。プトレメーウス一世や、クリタルクス(Citarchus、二百

年頃の人)のアレクサンドル史、ヅーリス(Duris)、チメーウス(Timaeus)の著、カルヂヤ(Cardia)のヒエロニムス(Hieronymus)のチャドック史、ピルス、アラツス、プトレメーウス・エウエルゲテスの自傳等皆さうである。唯、此の間に在つてポリビウス(Polybius)のローマ史のみは可なりな部分が原形の儘で遺つて居る。彼は三〇九頁に述べたアケイヤの千人の人質の一人としてローマに行き、スキピオ家の人々と交はり、又自ら政治的活動も爲して居るので、その記述は史料として價值があるばかりでなく、その世界史的把握は注目すべきである。斯様な試みは、上述のヅーリスや、ポセイドニウス(Poseidonius)等にも見られる。なほ興味ある事には、エジプトの僧侶マネト(Manetho)及びマンロンのベル神の僧侶ベロツス(Berosus)が、各、ギリシヤ語を用ひて、其の祖國の古史を書いて居ることで、世界史記述の試みとともに、いかにもヘレニズム時代にふさはしいことである。

經濟學

三世紀の初頭に出來たいはゆる『アリストテレス』の經濟學(Oeconomica)と言ふ書は、頗る小冊子ではあるが、此處に擧げる價值があらう。一體勞働、利殖に對する賤視の強

第三節 ヘレニズムの文化

かつた古典時代には、今日言ふ經濟學は、獨立の科學としては發生し得なかつた(クセノフオンの『家政家』、アリストテレス『政治學』第一卷參照)。本書第二卷には頗る簡單ながら、王、サトラップ、都市、私人の四種の經濟が扱はれて居る。その説く所は、財政と呼ばんよりは支配者の奸策による搾取法であるが、王、サトラップを扱つた所に新時代の背景を認めねばならない。

次に純文學を觀ると、詩ではキレネ生れで文學學者としても有名であつたカリマクス(Callimachus)やシラクサのテオクリツス(Theocritus)等が純情を歌ふ詩人として優れて居た。他に、アラトスの『ファイノメナ』(Phainomena)のやうに、學問知識を盛つた詩も流行し、ローヅスのアポロニウス(Apollonius)の叙事詩『アルゴナウチカ』(Argonautika)のやうに神話を扱つた保守的なものもあつた。以上の詩人は悉く紀元前三世紀の人である。悲劇の時代は過ぎ去つたが、喜劇では、アテネで『中期喜劇』の後を繼いだ『新喜劇』がメナンドルス(Menandrus)、(三四二—二九〇)、フィレモン(Philemon)(三六一—二六三)等に依つて大成された。その取材は市民日常生活の些事であつた。

哲學の二新派

哲學に於ては、形而學乃至は倫理問題が重視され、その中心は相變らずアテネであつた。プラトン、アリストートル等の派の外に、エピクルス(Epicurus 三四一?—二七〇)とゼノン(Zenon 三三六?—二六四?)の二人が、獨自の學派を開いた。前者は快樂、即ち心の平靜を求むることを賢人の理想とし、個人主義の色彩が強く、後者は自身理性(phronesis)である所の自然(physis)の法則に隨つて行動す可き事を教へた。此の兩派殊にゼノンの「ストア(Stoa)派」の學説は、ローマ帝政期に至る迄永く知識階級の人々の行爲の規範となつた。

宗教の變遷

宗教を觀ると、ヘレネスの分布とともにオリンプス山の神々が、世界僻遠の地まで崇拜さるゝやうになつたのは當然であるが、それは最早新時代の人々の心に眞の慰安を與へ得るものでは無かつた。嘗てはアテネ市民にとつて敬虔と嚴肅の象徴であつたパルテノンに市民がその妻妾を連れて來て宿泊し、饗宴に耽つても、人々は怪しまない有様であつた(Plut. Demetr. 26)。此の時代には有爲轉變の激しさが人心に與へた影響からか、チユケー(Tyche 運命の女神)の崇拜が廣く行はれた。なほプロトレメーウス一世や、

フラミニウス等が、自由の擁護者として『救済者』(Soter)と呼ばれ、神的崇拜を受けたことは、當時ヘラス人の無氣力と卑屈な心理とを反映して居る。是は更に進んで、ヘレニズム國家の専制主義の象徴である『王の崇拜』とまで進んだ。

其の他此の時代に、外國宗教が東西に廣まつたのは當然の事である。ギリシヤ人は各地の神々をオリンプスの神々と同一視し、いはゆる『ギリシヤ的解釋』(interpretatio Graeca)を行つたので、二世紀の頃エジプトに於て、大抵の神々はエジプト名とギリシヤの名を兩方持つやうになつた。エジプトの神々の中非常な流行を見たものに、サラピス(Sarapis)がある。是はプトレメーウス一世がエジプト人、ギリシヤ人の爲めに共同の崇拜物として與へたオシリス—アピス(Osiris-Apis)の名がつまつてギリシヤ化された名で、元來メンフィスで下界の神として崇拜されたのであつた。王はアレクサンドリヤに『サラピスの宮』(Sarapeum)を建て、此の信仰の宣傳に努めた。此の神はギリシヤ人の神々の中、下界と富、豊饒とを司るプルートー(P Pluto)と、進んではゼウス、ディオニス、アスクレピウス等とも同一視され—此の時代の諸神混合(syncretism)の代表—女神

サラピスの崇拜

其の他の東方諸神の流行

イシス(Isis)と共にラグス家(プトレメーウス家)の代表神となり、その崇拜は三世紀の半以來、非常な勢で弘まつた。是は王家の宣傳の外、イシスの祕儀(mysteria)が、信者に死後の幸福な生活を約したことから、下層階級等の要求に適つた爲めであつた。此の他小アジアのキベレ(Cybele)とアッチス(Attis)、シリヤの神アタルガチス(Atargatis)とハダド(Hadad)、フェニキヤの神アドニス(Adonis)とメルカルト(Melkart)、イランの太陽神ミトラ(Mithra)等の崇拜が紛然として流行して居た。其の他東方的迷信、例へばメソポタミヤ系の占星術等も弘く行はれた。エピダウルス(Epidaurus)の醫神アスクレピウス信仰の大流行にも、科學隆盛の世紀の反面を窺ふことが出来る。然し教養ある階級は、到底以上の神々によつて安心立命を得ることが出来なかつた。人生問題、倫理問題を中心とするストア、エピクルスの兩哲學派の流行は、正しく『高き宗教』の缺如を物語ると見てよからう。キリスト教の發生は、此の缺如を補つたもので、その弘通はヘレニズムの世界文化を背景として始めて可能だつたのであるが、その詳細はローマ史に譲つて此處には立入らない。

ヘレニズム時代の宗教とキリスト教との問題は Paul Wendland の Die Hellenistisch-römische Kultur (Handbuch zum Neuen Testament) によつて巧みに扱はれて居る。

彫刻の新傾向

最後に造形美術を観察して此の小冊子を結ばう。彫刻に於ては特別な新機軸は見られない。たゞ此の頃から、彫刻が實用に供されて、主権者や、文人學者等の肖像製作が始つたことは注目に價する。吾々が今日見るギリシヤ人—例へばホメルス、ペリクレス等—の肖像は、みな此の時期の作にかゝるのである。彫刻の中心もアテネを去つて東方に移つた。

現存せる逸品

レッシングの論文で有名なローヅス島で作られた「ラオコーン (Laokoon) 群像」(一世紀の作)、サモトラケ島 (Samothrace) 出土の風に吹かるゝ女神「ニケ」の像等は、何人も知つて居るメロスのヴェーヌス (アフロヂテ) と共にヘレニズムの作風を代表して居る。題材は依然神々であるが、『人間化』の過程が四世紀にも増して進んで居る事と同時に、内容的充實よりも、外面的形式的技巧に流れた傾きがないでもない。なほヘレニズム時代の美術史上忘れてならないのは、小アジア沿岸のペルガムム王国である。アッ

ペルガムムの美術

落丁

p. 327 ~ 奥附

62

三省堂編輯所編纂

模範最新世界年表

改訂増補

・三六判・美装・五六〇頁

定價一圓五十錢・送料八錢

歴史教授にあつて、年表は最後の鍵を握るものだ。この年表こそ、歴史教授に當る諸彦の一日も手離せぬものだ!!!
數千年の久しきに亘る人類のあらゆる體驗を一望の下に、容易に且つ迅速に一覽し得るやうに出來てゐて、年代、人名、地名等の正確は素より、對照檢索上の便を計つて重要な表や索引をも附けてある。教室に書齋になくてならぬこの一冊!!

62

250

政治史と社會史との完全な鳥瞰圖!!
最新最密の日本歴史年表として重要な事項には正確な史料による月日まで記載してあり、特に近世に於ては社會的事項に留意し、主要人物の死去その他をも記入してある。欄外に重要事項の頭註を附し、系譜を卷末におかず、その事件の頁に入れ、逆算年表及び中心人物を連続的に表示し、更に苦心創案になる人名索引と事件索引とがある爲に、檢索上甚だ便利である。

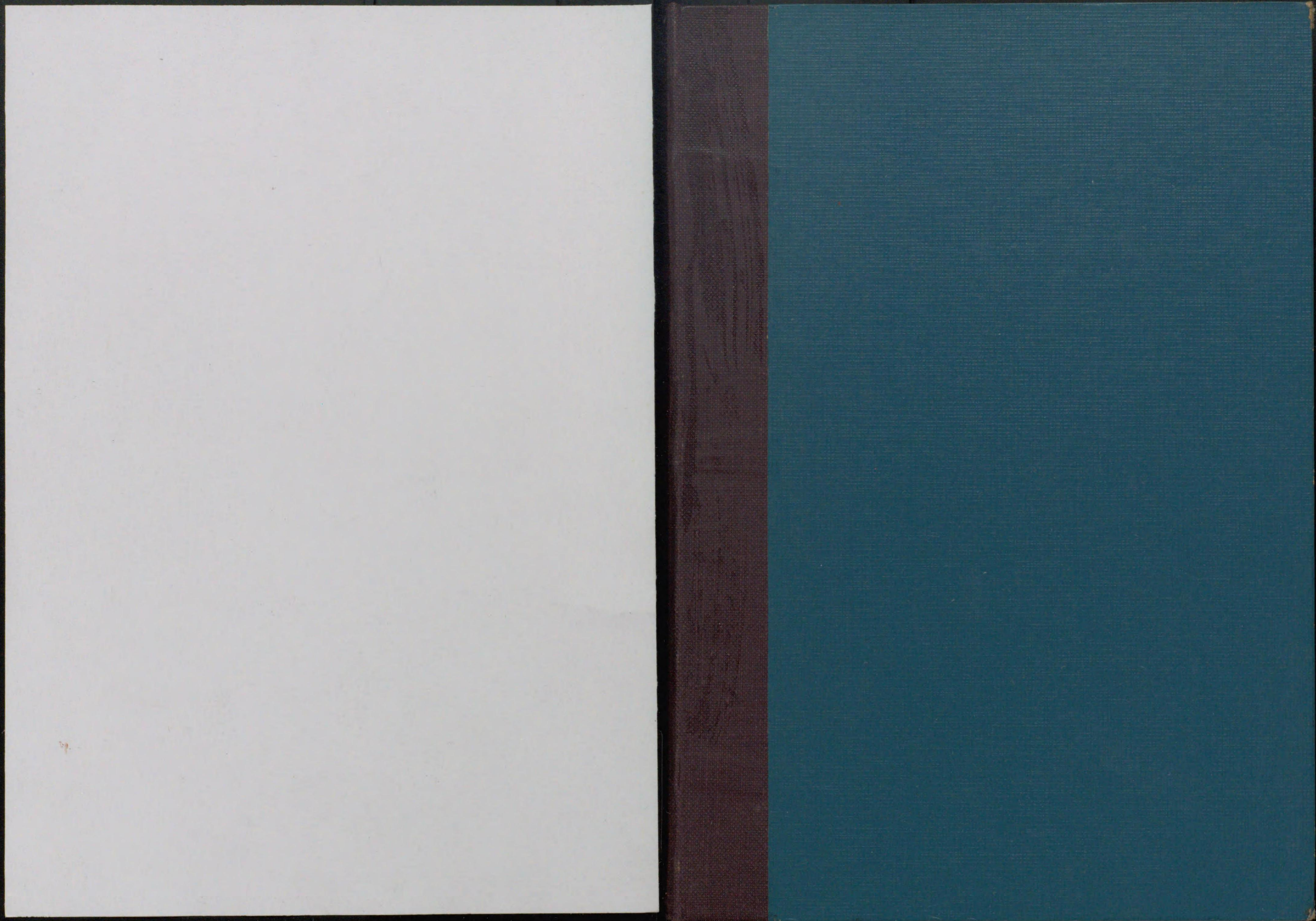
定價三圓八十錢・送料十八錢
三六判・クローズ装・七〇〇頁

最新 日本歴史年表

大森金五郎・高橋昇造共著

6
2

602
28

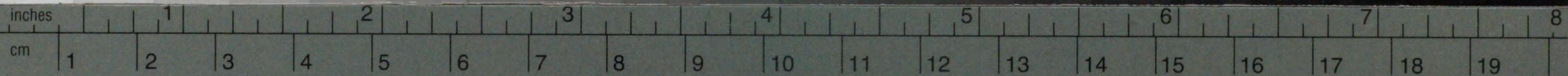


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

